

---

# Fate/for the permanent peace

kawajanz

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Fate/stay night permanent peace

### 【Nコード】

N4410R

### 【作者名】

kawa.jan

### 【あらすじ】

『Fate/stay night』UBWトゥルーハンド後のSSです。

## Introduction

我々が生きるこの世界は、絶対にして不变である。しかし、我々が生き得た世界は、この世界とは別に存在している。それが「並行世界」である。

並行世界とは、無限に連なる可能性の世界である。要するに、同じ時系列には属するが、全く異なる世界のことである。自分が男である、女である、金持ちである、貧乏である、幸福である、不幸である、もしくは存在すらしていない可能性、そのあらゆる可能性を内包する世界こそが、並行世界なのである。

ゆえに、この並行世界は、過去・現在・未来に渡り、全ての人間が選び得た全ての運命の数だけ存在するのだ。それも、その運命というのがどこで分岐しているかは、本人でさえ分からない。我々が気づかぬ内に、世界は多様に分岐しているのである。しかしその分岐点において、我々が取れる選択肢は常に一つだけである。そして、その道を選んでしまえば、決して戻ることはできず、ただ進むことしか許されない。世界は無数に存在しているのも関わらず、我々は一つの世界に生きることしか許されないのである。

ここにとある男の話をしよう。その男という人間の運命は無数に存在する。しかし、その男の運命は一つしかない。彼が進むべき道は一つしかなく、辿り着くべき答えは一つだけである。

その男は、7歳の頃、多くの犠牲者を出した大火災に直面した。目の前で多くの人々が彼に助けを求め、そして死んでいった。しかし、彼は生き残った。

彼はその後、自らを魔術師だと名乗る男の家に養子として引き取られた。そして、その新しい父親の死を見届けると、彼は父の遺志を引き継ぎ、正義の味方を志す決心をする。

そして年月が経ち、彼は穂群原学園の高校一年生となり、三学期が始まって間もない頃、彼は人生をも左右する事件に巻き込まれることとなる。それこそが、7人のマスターと、そのサーヴァントが、冬木市に伝わる第726聖杯をめぐつて殺し合いを行う「聖杯戦争」と呼ばれる儀式である。

彼は、とあるきっかけで冬木市では5回目となる聖杯戦争にセイバーのマスターとして参加することとなり、糺余曲折を経て第五次聖杯戦争の勝者一人となる。そして彼は、この戦争の過程で、一人の女性と出会い、恋に落ちることとなる。さらに彼は、生涯正義を貫き通し、死後も守護者となつて世界に奉仕し続ける己の理想が行き着いた自分の姿とも出会うが、彼は己の理想が「多数を救うために少數を切り捨てる」ような無慈悲なものに変わり果ててしまうことを許容できず、両者は衝突して、最終的に彼は、守護者となつた自分に打ち勝つ。彼はこの第五次聖杯戦争を通じて、最愛の人を手に入れ、正義の味方としての己の信念と理想を再確認することができた。しかし、一方で、自身の理想が歪で、不透明なものであることを思い知らされこととなつた。こうして激動の第五次聖杯戦争は幕を閉じた。そして、彼の新たなる生活が始まつたのである。

これまでの彼の人生を鑑みても、奇跡と呼ばれることは何度もあつた。確かにその場面において、一つでも違う選択肢を彼が取つていたのならば、今の彼は存在しないことであろう。否、そういう選択肢を取つた世界も彼の世界とは別に存在するのである。しかし、彼は数々の困難に直面しながらも、その都度答えを選択し、今の彼に辿り着いたのである。彼という人間の運命は、無数に存在してい

る。しかし彼の辿る運命は一つだけだ。ゆえに彼は、この先の人生も、自らが選ぶ一本の道だけを信じて歩き続ける。

その男の名は衛宮士郎。

これは、衛宮士郎とこの男の、一つの可能性の物語である。

『Fate/for the permanent peace』

## Introduction (後書き)

- \* - \* - \* - \* - \* -

こんにちわ。kawa.janです。

私のサイトで公開中のCSSを少しずつこちらにも移行して行こうと思います。

毎週更新を目指して頑張ります。

私のサイトのほうでは、結構先を進んでいます。続きが気になる方は、是非サイトのほうにいらっしゃってください。

<http://skybluegeneration.web.fcc2.com/>

## 決意 / side Rins

聖杯戦争も終わり、気づけば今日で高校一年の春休みも終わる。

思い返してみると士郎と出会ってからまだ3ヶ月しか経っていないのに、士郎がこんなにも大切な存在になるなんて思つても見なかつた。

今は毎日が本当に楽しい。

士郎の家に泊まって、士郎の作った朝ご飯を食べて、士郎の朝稽古を見て、士郎の作った昼ご飯を食べて、士郎と一緒に買い物に行って、士郎と一緒に夕ご飯を作つて、士郎に魔術を教えて、ついでに英語も教えてあげて、あとついでにドイツ語も……つて、ちょっとやけに過ぎかな？でも、これから先必要なんだからしょうがないわよね。うん。そうよね……

それで、お風呂に入つて（さすがに、一人に入るわよ。だけど、たまに…。）、わたしの部屋で寝る（のは、最初の30分だけで、結局士郎の部屋に行つちゃうんだけどね。だけど、士郎つてば最近生意気なのよ。『なんだ遠坂、寂しいのか？』って、そんなこと聞くんじゃないわよ！寂しいに決まってるじゃない！…）。

そんなこんな繰り返しだけど、もつこれでもかつてくらい、わたしは幸せです。

はあ、本当に3ヶ月前のわたしが、今のわたしを見たら何て言つかしらね。

でも、しょうがないじゃない。

今のわたしは、士郎なしでは生きていけなくなっちゃつたんだもん。

ああもうーーー、魔術師失格だあ——————！

「めんなさい、お父様。

わたしありが黙田です。

死にます。

.....

いえ、死ねません。

士郎を最高に幸せにするまで死ねません。

見てなさい、アーチャー！

士郎は絶対アンタのようにはしないわ。

これ以上ないくらい幸せにしてやるんだから—————。

## 決意 / side Rins (後書き)

- \* - \* - \* - \* - \* -

こちらでは、サイトで公開しているものを移行していきます。  
とりあえず最初のほうは毎週更新で、行こうと思つてます。

この後書きには、サイトでは語つてない小話や設定を載せてこいつ  
かと思います。

多分にネタバレが含まれることが予想されますので、

ネタバレNGな方は、私のサイトの方で連載を読んでいただく」と  
をオススメします。

サイトの更新情報は、活動報告にてさせていただくことになります。

## 朝の風景

現在時刻は朝の6時半を回ったところ。俺は台所で、最近はもうすっかり定番になつた洋風の朝食を作りつとしてこねといろなのが……

すう～ふわあ～

猫のパジャマを着たゾンビが現れた。

「……遠坂。はい、牛乳」

「ん。……ふはあ。生き返るわ

やはり死んでいたらしい。

「もういいかげん朝に慣れよな遠坂」

「毎朝同じことを言つてこむ氣がするのだが、遠坂が朝に慣れる気配は一向にない。

「なによ。魔術の研究をするのは夜中が一番いいのよ。それにアンタ、昨夜はあんなに激しく……」

ゾンビが悪魔に進化した。

「わかった。俺が悪かった。でもあまり無理するなよ

「無理してないわよ。なんだかんだで五時間は寝てるし。それより

もアンタよ。昨日だつてあの後また魔術の鍛練したでしょ

「うう。まあ、そのなんだ。俺のことばじりでもいいんだって」

「よくないわよ。わたしの講義を受けているのに、その後にアンタの無茶苦茶な自主練をしたんじゃ、アンタいつか死ぬわよ」

自主練したくらいで、死にやしないだろ。

「いぐら何でもそれは大げさだぞ。俺はただ、その日酔ったことを復習しているだけだ」

「復習をするなら、わたしの見ていろといひでやりなさい。アンタがこのまま自主練を続けてアーチャーみたいになつたりびうするのよ。髪が白くなつたら、記憶が薄れていつたら、口が悪くなつてしまつたらどうするのよ。そんなことになつたら、わたしは士郎を絶対に許さないわよ」

「俺だって、アーチャーみたいになるのは御免被りたい。

「いや…………でも自主練くらいは…………」

「黙目！絶対黙目！今後一切自主練禁止！――」

「おいおい……

「ちよつと待つてくれよ遠坂。俺は遠坂とロンドンに行って、迷惑をかけるのが嫌なんだ。だから、少しでも魔術を上達させてだな……」

「……」

「それで士郎が体を壊したら本末転倒でしょ。士郎がわたしのため  
に頑張ってくれるのは嬉しいけど、倒れられたりでもしたら逆に迷  
惑よ」

まあ、遠坂が俺のことを気遣ってくれるのは嬉しいんだが……。

「だから、自主練は禁止！」

「いくらなんでもそれはないだろ！それに、遠坂は俺が遠坂の前で必ず魔術を行使しろというけど、いくら遠坂が俺の師匠とはいえ、魔術師としてはどうかと思うぞ。魔術っていうのは、人前で無闇に使つていいものじゃないだろ」

「えつ？」

あれ？案外遠坂動搖してるな。

「士郎、わたしのことそんな風に思つてたんだ」

h  
?

「どういう意味だ？」

「士郎にとつて所詮私は他人なんでしょう」

「なつ！」

手にしなさい！！」

くそつ。なんてことを言つてんだ、俺はーー！

「待つてくれ、遠坂！俺が悪かった」

「今更遅いわよ

「それでも、俺が悪かったよ。この通りだ。ごめん  
しょ」

「そんな風に思つてるわけないだろーー！」

「俺にとって遠坂は誰よりも大切な存在だ！俺にはもう遠坂のいい世界なんて考えられない！お前のことを愛している。この気持ち  
は未来永劫変わらない」

「ちよつー！何よ突然！」

「許してくれ遠坂。俺はお前のことを他人だなんて思つてない」

「わかつたわよ。許してあげるわよ。その代わり自主練はやめなさい。どうしてもそれが嫌なら必ずわたしがいる所で自主練しなさい」

「……遠坂。わかつた。自主練するときは必ず遠坂を呼ぶよ

「絶対よ。わかつてゐる？」

「ああ。」

「なら、誓いのキスをしなれー」

「はー?」

遠坂今、とんでもない」とを言わなかつたか?

「…………」

本気なのか?

「顔赤いぞ」

自分で言つて赤くなるなよ遠坂。

「アンタだつて赤いじゃない

そりゃそつだろ。

「いくら遠坂が俺の恋人でも、キスするときは緊張するんだ

「…わたしだつてやうよ

そうつぶやく遠坂を俺は自分の胸に引き寄せた。そして、彼女の小さな唇に自分の唇を重ねた。

「んつ」

目の前にいるのは、魔術師でも、学園の優等生でもない、俺を好きでいてくれる女の子としての遠坂凜だ。遠坂のこの顔を見るのは俺だけだと思つと、本当に幸せな気持ちに満たされる。はたし

て俺はこんなにも幸せでいいのだらうか。俺なんかがこんなに…

「土郎？」

「どうした？」

「今、一瞬悲しい顔したでしょ」

さすがに女性は鋭いな。

「いや、何でもないぞ」

「今、何を思ったか言いなさい」

やつぱり誤魔化せないか。

「俺はこんなに幸せでいいのだろうかと想つても」

「やつぱりね。アンタの自虐ぶりは常軌を逸してゐるわ。幸せなら幸せに思えばいいのよ。むしろ土郎はずつと苦しんできたんだから幸せにならなきやおかしいのよ。それに土郎の幸せはわたしの幸せでもあるの。わたしが幸せになるにはアンタがまず幸せになってくれなきゃ困るのよ」

「やうだよな。詳しくは教えてくれないけど遠坂はアーチャーに俺を最高に幸せにするつて誓つたつて言つてたもんな。

「なんか俺つて、遠坂の重みになつてるよな」

「なんでアンタはそういう考え方しかできないのよ。土郎がわたし

「『氣』を使えば使つほどわたしの『氣』が重くなるってわからなー?」

「わかつた。遠坂が『氣』を使わなくともここよつて発言せね『氣』をつかるよ」

「全然わかつてないじゃない。十郎は言いたいことを言えばいいのよ。アンタはずっと一人で全てを背負ってきたんでしょ。でも、今はわたしがいるじゃない。わたしに全てをぶつけてしまおう」

「やうだな」

「俺はなんて幸せなんだらうつな。俺は本当にこんなに……」

「また回りじと囁ひたでしょ」

「つ。図星です。」

「そろそろ朝、」飯食べないとやまいんじゃないか?今何時だ、遠坂?

「あからさまに話逸らしたわね。まあいいわ。今は7時よ。少しまたいわね」

「うわー、もうそんな時間が急いで飯作るから、少し待つていてくれ」

「どうあえずわたしは顔洗つてくるわ

「わかつた」



「よし。鍵も閉めたし、弁当も持つたし、行くか遠坂」

「…………うと」

遠坂、やナに元気がないな。わつきまでは、いたつて普通だったのに。

「どうした? 具合でも悪いのか?」

「誰が?」

「遠坂がだよ」

「どうか、遠坂しか近くにいないだろ。」

「えつ、わたし? 平氣に決まってるじゃない」

やつぱりおかしい。

「それなら、悩みでもあるのか?..」

「ないわよ」

「本当か?」

「こつこわね。どうしてわたしが悩んでると毎回のよ」

「さつきから遠坂、思い詰めた表情してゐるしや、俺が話かけても上の空だから何かあるのかなと思って」

「うそ！わたし、そんな顔してた？」

「この反応は、やっぱり何かあるな。

「遠坂の返事がなによりの証拠だろ」

「やられた。今のは、ブラフだったって訳ね

「確かに結果的にはそうだけど、遠坂の顔色がすぐれないのは変わらない」

「はあ、アンタつて朴念仁のくせじでうつときだけ鋭いのよね

微妙に非難されてるよな。

「悪かつたな、朴念仁で」

「それは士郎だし仕方がないわよ

む。少しは否定してほしい。

「それで、何を悩んでたんだ、遠坂？」

俺の質問に驚いた表情をする遠坂。わけはやつてのやつ取りで話を有耶無耶にしたつもりだったな。

「なんでもこいじゃない

その手には乗らないぞ。

「なんでもいいなら俺だつてここまで質問しないよ。恼みごとがあるなら俺に聞かせてほしい。大切な人が目の前で悩んでいるのに黙つて見ているだけなんて俺にはできない」

「なつーだから本当に大したことないのよ」

全く、強情だな遠坂は。

「わかつたよ。そこまで、秘密にしたいなら聞かない。俺はただ、言いたかったことを言つただけだから気にしなくていい」

「……アンタ、壇つようになつたわね」

“じつやうり、今回は俺が言い勝つたよつだ。

「やうか？俺は遠坂と約束したことを実行したまでだけど

やうきのちよつとした仕返しも兼ねてだけどな。

「……はあ、本当に恼みつてほどのことでもないのよ。ただし緊張しているだけよ」

遠坂の声と表情から察するに、今度は本当だらう。

「緊張？今日つて何か緊張する」とあつたか？」

今日は始業式だとこいつとを除いたら、普段と大して変わらな

いと思つんだが。

「知らないわよ」

「遠坂が緊張するなんてな。少し驚きだ」

「俺がそう思つて、遠坂はあきれ顔で俺を見つめた。  
俺が何かしたのだろうか？」

「わたしは平然としているアンタの方が不思議よ

「なんですか？」

「……はあ。士郎を見てたら、なんだか自分が馬鹿らしく思えてきたわ」

「俺が何かしたのだろうか？」

「そんな惚けた顔してないで、早く行くわよ、士郎」

遠坂の機嫌はよくなつたみたいだが、何が何だかさっぱり分からぬ。

「ほひ、早く行きましょ」

まあ、学校に着けば分かることだから今気にしてもしょうがないか。

「よし。行きますか

俺は差し出された遠坂の手をとつて、桜舞散る穂群原学園へと歩を進めていった。

今日は始業式である。そのため、登校時間は普段よりも遅いが、俺たちは普段通りに登校していた。別に俺たちが始業式の登校時間を忘れていた訳ではない。この時間帯なら人目を気にせず登校できるだろうということで早めに出発したのだ。聖杯戦争が終わり、俺は遠坂の彼氏となつたのだが、今まであまり面識のなかつた二人が、ましてや学園のアイドルであり幾人もの男子による求愛を悉く断つてきた遠坂凜が俺なんかと付き合つているとなると、ある日突然恋人同士なるのは不自然だし、あまりにも目立ちすぎるので良くないということから、学校では春休みが終わるまではお互い見知らぬ振りをしようということになつたのである。そして今日から公然とカップルとして振る舞えるようになつた。ただ、初日ということもあり、少しは人目を憚ろうということになつたのだ。

「そうか。それで遠坂は緊張してるのがもな」

それにしても表面上に現われるほどの緊張を、遠坂がそんな理由でするとは思えない。前の学期でも、遠坂の方から約束を破つて接觸していくことが多々あつたし、休みの日に堂々と一人で街中を歩いたりもしていた。それにもかかわらず、今更緊張する必要がないように思う。

「やっぱり、変だぞ。遠坂」

「遠坂の何が変なんだ、衛宮？」

「美綴……」

「よつ。お一人さん、仲がいいね」

「なんで、美綴がここにいるんだ？」

「こちや悪いのか？あたしゃ、こここの生徒なんだがね」

「こや、わつこつ意味じやなくて、なんで美綴はこんなに早く登校しちるんだって話だよ」

「れはまづこやつに会つたな。美綴は俺たちのことを言つたら  
あよづなヤツじやないけど、当分の間はからかわれる」とだらり。

「アソタうちこみつかいをだわつかと思つてさ」

俺たちが早く登校するのを知つてたのか？

「……つてこいつのは嘘で、新入部員勧誘で朝早くから登校して、  
後輩達にアドバイスしてやるうと思つてさ」

なんだ、そういうことか。

「しかし、あの遠坂が衛宮とねえ。案外、ありえなくもないか」

「確かに、まさか俺も遠坂と付き合つてになるとせ思わなかつた

「

俺の言葉を聞くと、美綴はニヤリと口元を歪ませた。

「要するに、卫宮と遠坂は付き合つてこるわけだ。」

あつ……しまつた。

「あはは。安心しな、衛宮。アンタと遠坂が付き合つてるのは、アンタらが一緒に歩いてる時点で気が付いてたから」

「なんですか？」

「なんでって、遠坂は男と一人っきりでなんか絶対一緒に歩いたりしないじゃない？」

確かにそうかも……

「まあ、最近の間桐の様子を見てて、衛宮に何かあったことには気が付いてたけど、そうゆうことだったんだな」

「間桐？ 慎一がどうかしたのか？」

「あのね。あたしが間桐って言つたら妹の方だよ」

「桜？」

俺が桜に何かしたのか？ 余計に混乱してきた。

「はあ、もうここまで朴念仁だと、すごいとしかいいようがないわ。ねえ、遠坂？」

「……」

美綴が話かけても遠坂は、まるで銅像のよう立つたままぴく

りとも動かない。

「ひつや、石像だな。」

「同感。それよつ……おーい、遠坂。」

遠坂は、俺が揺すつても一瞬を凝視したまま凝固してしまって  
いる。

「おーい。じつじたんだよ、遠坂」

俺がそう叫び、やつと遠坂は反応して、虚ろな目で見つめ返  
してきた。

「……あつた

遠坂はそう呟いたのだが、なんのことがさっぱり分からない。

「何があつたんだ？」

「そんなの決まってくるじゃない！」

そんなことを言われても、残念ながら分からぬ。

「まだ、分からぬの？あつたのよ、名前がー。」

「名前？」

「同じ組にわたしとアンタの名前があつたのーー。」

「なるほど。クラス替えか

「やう言えば、さつき見たけど、衛宮と遠坂もあたしと同じクラスだつたな。」

美綴も同じクラスか。これはまた、充実した一年がおくれそうだな。

「つて、綾子！…なんでアンタがいるのよ。」

「あたしは随分前からいるよ。な、衛宮？」

「ああ」

遠坂はきょとんとした顔をした。

「嘘よね？」

「あたしが嘘をついて何の得があるって言いつんだい？」

「うう」

「まさかあの遠坂凜が、恋人と同じクラスになれるかどうかで一喜一憂する乙女になるとはね」

なるほど、遠坂が緊張してたのはそういう理由があったのか。

「あら、美綴さん。アンタから私がそのように見えるのなら、賭けはわたしの勝ちといつていいか

しら

「いや。まだ、負けと認めるこ早いね」

「往生際が悪くてよ、美綴さん」

「一人が何のことについて話しているのかさっぱり分からぬ。

「なあ、賭けって何なんだ?」

「ああ、先に彼氏を作つて、相手に羨ましがられる関係を築いたほうが勝ちっていう至極単純な賭けなんだけど、まだあたしは衛宮と遠坂がラブラブなところを見てないじゃない?まだ、負けとは認められないな」

「なるほどな。……って、もしかして賭けで勝つために俺と付き合つことにしたのか?」

「俺は心にもない」とをあえて口にしてみた。すぐに遠坂が否定してくれることを信じて。

「馬鹿なこと言つんじゃないわよ。せき合つだけが目的ならどうしてアンタみたいな朴念仁で唐変木で無神経で浮氣者をわざわざ彼氏にしなくちゃならなのよ」

「さすがにそこまで言われるとこむぎ、遠坂。散々な言われようつなので、もう少しからかうこととした。

「わかつたよ。遠坂は俺のことが好きでもないのに付き合つてくれてたんだな」

「なつ！そんなわけないじゃない。半端な気持ちであなたと付き合つてゐて、士郎は本気で思つてるの？そんなんだったら、あなたと一緒にロンドンに留学したいだなんて言いださないわよ……」

やばい！

「遠坂！気持ちはずいぶん変わってきて嬉しいんだけど、さすがに今はまずいだろ」

俺がロンドンに留学することは、まだ藤ねえにも話していないトップシークレット事項だ。

「あつ……」

「俺だつてお前のことを愛してるんだ。遠坂が俺のことを好きでいてくれることを信じているに決まってるだろ。さつきは賭けの話がでたから少ししからかっただけだよ」

「士郎……わたし、とんでもない」と言つちやつた……

遠坂は顔面蒼白でそう呟いた。

「確かに遠坂の発言は迂闊だったな。ただ、幸い聞いていたのが美綴だけだったから、まあぎりぎりセーフだろ」

聞いていたのが美綴だけで本当によかつた。美綴は義理堅い人間だ。人の秘密を決してベラベラ人に話したりはしないだろう。

「いや、衛宮。アウトだつたかも知れない」

何か嫌な予感がする。

「どういつ意味だ、美綴？」

「さつきの話、たぶん間桐も聞いていたぞ。間桐のヤツが、木陰から走つて逃げていくのが見えた」

参つたな。留学の話は藤ねえにすら打ち明けてない話であつて、もうひるん桜にもまだ伝えていない。

「綾子！ 桜はどこで走つて行つたの？」

「どいかまでは分からぬけど、弓道場の方向だつたな」

遠坂は、みなまで聞かずに『弓道場の方へ駆けていつた。

「おいつ遠坂！……くそつ行つちまつた」

「悪い衛宮。あたしが面白がつて遠坂をからかつたせいだな」

「いや、美綴のせいじゃないよ。からかつてたのは俺も一緒だし、元はと言えば留学の話を桜にしてなかつた俺が悪い。それに、留学の話はいつまでも秘密にしておくような話じゃない。いずれ桜にも話す日は來たんだから、その日が早まつただけだ」

俺がそう言つと、美綴は顔をしかめた。

「衛宮。これはそんなに単純な話では済まないかもしない。アンタがどう思つかは知らないけど、失恋つていうのは相当堪えるもんなんだよ。自殺するヤツも出るくらいね」

失恋？何の話だらう。

「あたしはこれ以上言わないよ。アンタが気付いてあげなきゃ意味がないから。ただ言えることは、早く気付いてあげなきゃ取り返しおつかない」とになるかも知れない。それだけは覚えときな。あたしもなるべくフォローはするけど、ほとんど無意味だらうからね」

分からぬ。美綴はいつたい誰の話をしているのだらうか。

「美綴、お前は……」

「これ以上あたしから言つ」とはないよ。早くアンタの愛する人を追つてあげな」

愛する人を追つ。そうだ、俺は遠坂を追わなくちゃならない。どうして？それは、遠坂が桜を追つて行つてしまつたからだ。どうして桜は逃げたんだ？桜が俺たちの留学を知つてしまつたから……知つてしまつたからつて桜はどうして逃げる必要がある。待てよ、美綴の言つたことを思い出せ。失恋……

「失恋つて、桜なのか？」

「さあね

「なんだよ。問題提起しておきながら手厳しいな

「まあね。ただでさえあたしが誘導尋問したみたいなんだから、答えくらいは衛宮自身が出しなよ。あたしは、根が優しいアンタなら、大団円を迎えるられて信じてるから」

「答えを教えてくれない上に、フレッシュヤードでかけてくるのか。  
お前、意地悪いな」

美綴はからからと笑い声をあげて、言った。

「そりや当たり前でしょ。あたしの熱いラブコールを無視し続ける  
ヤツに、優しく接するなんてできるかよ」

そのわざには、ヒントをくれたりと優しそうだ。

「とにかく、今のアンタがやるひとは、遠坂を追いつくだよ」

「やうだな。ありがとう、美綴」

「礼を言つのはまだ早いよ。全でが無事に解決したらあたしの言つ  
ことを聞いてもらひながら、今はやるべきことをやりな

それは恐ろしいな。

「じゃあ、礼は全部が終わった後までとつておくよ」

「ええ。そのかわり、アンタはアンタの納得のいく答えを必ず見つ  
けてこい」

「ああ。必ず……」

美綴と握手を交し、俺は遠坂が向かつた方向に歩きだした。

## 衝突／side Rins

わたしは桜を必死に探した。そして、弓道場の裏手でついに発見した。

「桜！…」

「遠坂先輩……」

「桜。留学の話はまだ正式に決まつた訳じゃないの。だから……」

「遠坂先輩、いいですよ。わたし、先輩と遠坂先輩が付き合つているのは知つていましたし、留学の話だつてよく考えれば当たり前のことですよね。それにわたしは、先輩と遠坂先輩はお似合いのカップルだと思いますよ。絶対幸せになれます。だから、わたしのことを気にする必要はこれっぽっちもないですよ」

「桜……確かにわたしは士郎を愛しているわ。でも、桜から士郎の全てを奪おうとは思つていないわ。わたしは士郎を幸せにする。だけど、士郎を幸せにするには貴女が必要なの。だつてわたしたち……」

「…」

「それ以上は言わないでください。先輩は遠坂先輩がいれば十分幸せになれますし、遠坂先輩も幸せになります。それにわたしは、間桐桜ですから」

「桜……そんな……」

「では遠坂先輩、わたしはこれで失礼します」

「待つて桜！！」

「さよなら遠坂先輩。お幸せに……」

「桜！」

二〇四

「うう……ああう……あ

## 呪い

「道場の裏手で、うずくまる遠坂の姿を見つけた。

「……遠坂」

俺が呼び掛けると、遠坂は虚うな顔をしてこちらを見上げた。

「大丈夫だ」

なぜそう言つたのかは分からぬ。ただ、遠坂を見ていたらそれしか思い浮かばなかつた。

「わたし……やつぱりバカだ」

「大丈夫だつて、遠坂」

「どうしてそんなことが言えるのよ」

「お前は遠坂凜だ。お前の選択が間違つているはずがない」

「そんなん……根拠もあるわけ?わたしはね、ここんどこう時に取り返しのつかない失敗をするのよ。それは士郎も知つてゐるじゃない」

「ああ知つてる。確かにお前は大切な時に大ポ力をやらかすのかもしない。でも、それが間違つていたことがあるか?」

「どういう意味よ」

「聖杯戦争覚えてるよな」

「当たり前じゃない」

「なら、あの外人墓地での独り言も覚えているだろ」

「……」

俺はセイバーをキャスターに奪われ、遠坂はアーチャーに裏切られた。そして、あの外人墓地で遠坂は俺に自分の心情を語ってくれた。稀代の魔術師遠坂凜が、人間遠坂凜としてはじめて俺に内側を見てくれた瞬間だつた。俺はあの時のやりとりを一生忘れないと思う。なにせ、俺が遠坂に告白したのがあの時だつたからな。

「遠坂は確かにここぞというときに失敗をするかもしれない。だけどそれは、ただの失敗であつて遠坂の選択が間違つているわけじゃないんだ。お前は失敗した分、その失敗を何倍・何十倍で相手に仕返すだろ。桜も気の毒だよ。桜は遠坂を突き放した分、きっとその何十倍の仕返しをされるからな」

魔術に関してはド素人の俺がセイバーなんかを召喚してしまったために、俺は遠坂のとんでもない仕返しを受ける羽目になつた。なにせ、俺はもう遠坂なしでは生きていけないようになつてしまつたのだから。

「だから、遠坂凜は恐ろしいんだ。お前を倒すためには、仕返しができないほどにボコボコにしなくちゃならないんだからな。さもなぐば、お前の呪いに犯されて、一生付き合わされる羽目になる」

「そうね。アンタを手放すことは、絶対にありえないから」

ああ。俺はもうお前のものだ。そして、俺もお前を一生手放さない。俺のそばには遠坂がいて、遠坂のそばには俺がいる。これは呪いだ。エミヤ・シロウにとつて最強で最凶の呪い。しかし、衛宮士郎にとつては最高で最幸の呪い。俺の人生は遠坂凜という人間が入ってきたことでがらりと一変した。そして、それこそが衛宮士郎の運命の最大の分岐点だったのかもしれない。

「なら、桜もみすみす手放すつもりはないんだろ。お前はきっと桜を一生許さない。桜がこれ以上ない幸せを勝ち取るまで、お前は桜を呪い続けるんだ」

「ええ。そうね。わたしはアンタも桜も一生許すつもりはないわ。わたしの魔術師としての人生を台無しにしてくれたんですもの」

「ああ。それでこそ、俺の知る遠坂凜だ」

「わたしが悪かつたわ。あの外人墓地でも言ったように、わたしは後悔はしたくないの。ううん、しないの。だったらこんなところでいつまでも燻つているわけにもいかないわね」

「ああ」

やつぱり遠坂凜は眩しい。

「よし。そうとなれば今日は家に帰りましょ。なんだかいぐら始業式だけでも学校にいたっていう気分じゃないわ」

「そうだな。きっと、藤ねえにはじびくじく叱られるだろうけど、

藤ねえと桜の分の弁当を置いて、今田のところは帰るとか

「ええ」

「なんだよ遠坂、ずいぶんと機嫌がよくなつたな」

「誰の所為よ」

「わからないな」

「……バカ。もう知らない」

ふんっとわざとらしく振り返つて、遠坂は正門の方へ歩いていった。

「やれやれ、赤い悪魔様の御乱心が収まって、臣下としては一安心ですぞ」

誰にも聞こえない声でそうつぶやいて、俺は彼女の隣を歩くべく最愛のパートナーの元に駆け寄つたのだった。

## 不安

俺たちは衛宮家に帰ってきた。藤ねえに帰ることをメールで送ると、嫌味つらみが多分に含まれているものの、弁当を運んだことに免じて今日のところは許すというものだったので、とりあえずは一安心である。

「とりあえず昼飯は弁当でいいとして、夕飯は何がいい？」

「ん？ わたしは何でもいいわよ」

「そうか。えっと、藤ねえは忙しいから今日は来れなくて、桜は…まあ来ないよな。じゃあ一人分か」

「二人きりなのに、全然嬉しくないわ」

やはり、気持ちの整理はついたとは言えども、桜に突き放されたことは相当堪えているのだろう。

「まあ、あんなことがあつた後だしな」

「士郎に朴念仁って散々言つといて自分がこれじゃあわけないわよね」

俺の場合は遠坂とは違つて自覚がないつていうおまけ付きだけだな。

「そんなに考えたつて仕方がないだろ。遠坂凜は後悔をしないんじやなかつたか？ それなら、前に向かつて進むしかないだろ」

「そうなんだけれど、でも……」

「らしくないな、遠坂」

遠坂は桜と仲違いをする以前も、桜の話題のときに何とも言えない寂しげな表情をすることがしばしばあった。魔術師として人の接点となるべく断つてきた遠坂だが、桜に対しては並ならぬ感情がどうもあるらしい。

「桜がお前にとつて大切な人だつていうなら、尙更落ち込んでる場合じゃないんじやないのか？もつ済んでしまつたことをあれこれ悩んでも事が解決するわけでも何でもない。本当に桜のことを想つてゐるなり、今は桜とビビッド仲直りをすればいいのかを考えるべきだと俺は思つぞ」

「分かつてはいるの。せむべきことはわかつてはいるのよ。だからこそ不安なの。もし、桜と仲直りできなかつたらどうしようつて、後悔なんかしたくないのにどうしてもそう思つてしまつのよ」

「それは後悔じゃなによ、遠坂」

「えつ？」

「遠坂も自分で言つたじやないか。お前が抱いてる感情は不安つてものだ、いやもしかしたら愛情つて言い換えた方がいいのかもな」

俺は遠坂が落ち込んでいるのかと思っていた。でもそれは違つた。それを遠坂の言葉で確信した。遠坂凛は、やっぱり遠坂凛だ。

「お前は自分で不安つていったけど、不安つていうのは後悔とは似て非なるものだ。遠坂は桜を傷つけたくない。桜との関係をこれ以上悪化させたくない。お前はそう思つてゐる。それは、過去の失敗を悔やんでもいつまでもくよくよしていふような後悔とは違う。お前はしつかり前を向いている。未来に向かつて進もうとしている。未来を見据えた上で悩んでいる。確かに前向きではないのかもしない、それでも後ろはもう氣にしてないだろ。過去があるから、未来に進めるんだ。それとは反対に、過去に囚われているヤツは未来には進めない。遠坂凜は辛く重い心を背負いながらも一生懸命前に進もうとしている。だからこそ、道の先にある障害物に目がいくんだ」

きつと、遠坂はもうそのことに気づいているんだと思ひ。それを心が否定しているだけなんだと思つ。だから、俺にできることは遠坂を前に押し出してやることだけだ。

「障害なんて氣にすることはない。お前は、どんな障害だつて乗り越えられる。今までだつてそうだつただろ。聖杯戦争だつて、絶体絶命の窮地からこれ以上ないほどのハッピーエンドで終わらすことができたじやないか。お前は逆境でこそ力を發揮する。それは、お前の恋人である衛宮士郎が保証する。それに、お前は独りじやない。遠坂にも越えられない壁があるなら、俺がお前を全力で支えて、二人の力で越えていこう。俺たちに越えられない壁はない。だから道の先にある障害物なんて氣にする必要はない。お前は自分を信じて、前に向かつて歩いていけばいいんだ」

「……士郎。わたしの完敗かも。悔しいけど、アンタがずっと側にいてくれるつて思つたら、なんでもできるような気がする。結局わたくしは、自分が独りになつてしまつのが怖いだけなのかも知れない」

「独りになる恐怖。それは俺にも分かる。」

「そうだな。独りになるつていうことほど怖いものはないのかもしない。十年前の大火灾で俺は呆然と立ちつくしていた。家も両親も自分さえも失って、何もなくなつて俺は独りになつた。自分が誰かすらも分からない、ここがどこかすらも分からない。あの時の俺には、目の前に広がる光景への恐怖だけがあつた。家は跡形もなく崩れ去り、人々が苦しみの声を上げながら俺に助けを求めてくる。俺は完全に独りだつた。助けを求めることも出来ず、助けに応じることもできない。何も出来ない。それが怖かった。怖さのあまり何も出来なかつた。俺はいつたい何者なんだろう。もう何が何だか訳が分からなくなつて、とにかく怖かつた。恐怖だけがそこにあつた。そんな俺の目の前に、突如現れたのが親父だつた。嬉しかつた。誰かがいることが本当に嬉しかつた。独りじやないつていうことだけで、俺は心から救われた気持ちになれた。それが、あの時感じた素直な気持ちだつた」

そのときの気持ちこそが、今の俺の原動力になつてゐることは間違ひない。独りになるのが怖い、だから人の役に立つことをやつて少しでも誰かと関わつていてみたい。そんな気持ちが俺には少なからずあるのではないか。

「遠坂が感じている恐怖つていうのは、そう簡単に克服できるものじゃない。遠坂にとつては、今まで何でも一人でやつて來たつていう自負があるから尚更なのかもしれない。今、お前の側には、俺とか桜とか美綴とか大切な人が沢山いるだろ。そんな状況が幸せで仕方がないんだろ。だからこそ、誰かが自分の前からいなくなるのが怖い。遠坂はそう思つてる。違うか？」

「……うん。その通りかもしない」

「なら嬉しいな」

「えつ？」

「遠坂が独りになるのが怖いと思つてゐることは、俺たちのこと  
を大切に想つてくれてるってことだろ？俺はそれが嬉しい。俺も遠  
坂や桜のことが大切だから、俺を大切に想つてくれることがすぐ  
く嬉しいんだ。その気持ちが伝わつてくることだけでも本当に嬉しい」

人と人のつながりといつもの、目に見えるものではない。それ  
でも、心で感じ取ることはできる。

「遠坂は桜のことを本当に大切に想つてゐる。だから、桜が自分の前  
からいなくなることが怖いんだ。だけど、遠坂が心の底からそう思  
つてるのならその恐怖は遠坂にとって強い力になる。桜を失いたく  
ないつていう強い想いが、きっと遠坂を奮い立たせて、桜の心を動  
かすだらうから」

これで俺が言いたいことは全て言い切つた。後は遠坂次第だらう。

「……バカ」

今にも泣き出しそうな声で遠坂はそう呟いた。

「土郎にまた泣かされた」

いや、全くそのつもりはなかつたんだが……

「いや、「ごめん」

「謝つてほしくなんかない。わたしは、士郎の気持ちが嬉しくて泣いてるんだから謝るな、朴念仁。それに、いつもを向いたら許さないわよ」

全くコイツは素直じゃない。

「わかったよ。しばらぐ側に歸つてやるから、落ち着くまで泣いていいよ。俺は向こうを向いてるから、俺の背中でも胸でも何でも使えるよ」

俺がそつと、遠坂は俺の背中に背中を合させて座つた。話しかけたりはしなかった。いや、話しかける必要がなかつた。背中を通して遠坂の体温がじわりに伝わつてくる。それだけで俺の心は満たされていた。しばらくの間、俺たちは無言でお互いの気持ちを確かめ合つていたのだった。

## 発現

遠坂と背中合わせに座つてから30分が経つた。

「ありがとう、土郎」

恥ずかしいのに遠坂が言つた。

「どういたしまして。わたくし、ちょうど昼飯の時間になつたな。弁当でいいよな?」

「ええ」

「よし。今持つてくるから少し待つて…っ！」

唐突に全身を激痛が走つた。

「どうしたのよ、しり…痛つ…」

「なんだ!…?」「な!…?」

声が重なつて遠坂と顔を見合わせる。

「土郎、左手の甲…!」

自分の左手の甲を見てみると、見覚えのある紋章のよつたものが浮かび上がつていた。

「令呪か?」

あまりにも突然の出来事で、脳の情報処理能力が追い付いていない気もしたのだが、俺が自分の左手の甲に現れている模様を分析した限りでは、令呪に間違いなかった。

「つそ…わたしもある。」

確かに遠坂の右腕を見ると令呪らしき模様がくつきっと浮かび上がっていた。

「包帯買わないとまずいな

訳が分からなくなつて、無意識のうちに俺はそう呟いていた。

「何馬鹿なこと言つてるのよ」

怒られた。

「それにしてもどうして令呪が発現してるんだ?」

「知らないわよ!—

怒鳴られた。

「また聖杯戦争でもはじまるのか?」

「だから知りなーって言つてるだろ!つがあああ——————

激しく怒鳴られた。



## 疑問

「落ち着いたか？」

「落ち着いたわよ」

まあ、突然発現した令呪を見て取り乱すのは仕方がないが、遠坂のあまりの形相にここ2・3分生きた心地がしなかつた。

「それで改めて聞くけど、どうして令呪が現れたんだ？」

「それが本当に分からぬいのよ」

「そもそもこれは本物の令呪なのか？」

「間違いない本物よ。魔力の流れを感じるし、感覚自体があるのと全く同じだもの」

確かにそう考へると本物だと判断せざるをえない。

「それなら、また聖杯戦争がはじまるつてことか？」

「普通に考へればそうだけど、いくら何でも間隔が短すぎるわよ」

「やつだよな。なあ、そもそも聖杯戦争ってどうやって起るんだ？」

俺は聖杯戦争のことを知つてゐるつもりで知らない。この際だから聞けることは聞いておこう。

「そうね。ここで聖杯戦争のおさらいをするのも悪くはないわね。  
もしかすると何か分かるかも知れないし」

遠坂はどこからともなく眼鏡を取り出して、講義モードに突入  
した。

## 聖杯戦争

「まずはそうね、土郎が分かる範囲でいいから聖杯戦争について説明してちょうだい」

聖杯戦争の説明か。俺は言峰教会でのアイツとの対話を反芻した。

「聖杯戦争とは、七人のマスターが七人のサーヴァントを召喚し、冬木に現れると言われる聖杯をめぐって殺し合いを行う儀式のことだ。七人のマスターは聖杯によつて選定され、マスターは英靈と呼ばれる最高ランクの使い魔を降靈し、サーヴァントとして使役する。サーヴァントの召喚にはその英靈にまつわる聖遺物を触媒とする必要がある。マスターにはサーヴァントに対する三つの絶対命令権“令呪”が与えられ、令呪が存在する限りマスターは聖杯戦争から逃れる術はない。……と、こんなところか」

「ええ。土郎にしては上出来よ。ただ所々が正式には間違っているわね。例えば、マスターを選定し、サーヴァント召喚のためのマナを集めているのは聖杯ではなくて、大聖杯と呼ばれるものなの。聖杯と大聖杯の何が違うかって言えば要するに、聖杯って言うのは望みを叶えるために一時的に必要なマナを集める器で、大聖杯っていうのは望みを実現するための術式、つまり聖杯戦争のシステムそのものってわけ」

ちょっと待つた、その話は初耳だ。

「つまり、聖杯とは別に大聖杯が存在しているってことか？」

「そういうことよ」

「遠坂、それってつまり……」

「あつ……」

聖杯を壊しただけでは聖杯戦争は終わらないってことなんじゃないのか。

「大聖杯を破壊しない限り聖杯戦争が続くってことだよな」

「…………」

「どうしてこんな大事な話を、あのときにしなかったんだよ」

「しょうがないじゃない。大聖杯の役割は、サーヴァント召喚用のマナを集めることとマスターの選定を行うくらいのことしかないのよ。まさか誰も聖杯戦争の時に大聖杯のことなんて気にするようなヤツなんていないのよ」

「つまり、大聖杯の存在すらあのときは忘れていたと」

「…………」

図星だな、これは。

「まあ、済んでしまったことは仕方がないし、先のことを考えよ。今回の聖杯戦争で俺たちがやるべきことは、その大聖杯ってものを壊すことでいいんだな」

「…………そういうことになるわね」

待てよ、大聖杯のことを遠坂が知つてゐることはある……

「もしかして、遠坂は大聖杯の在処を知つていたりしないか?」

「大聖杯の在処?……えつと、確か円蔵山の地下空洞にあるとかなりとか」

「それを今すぐにでも壊しに行けばいいんじゃないのか?」

遠坂は一瞬茫然自失といった表情をしたが、はっと正気に戻つて答えた。

「それは無理ね。普段の大聖杯には、どんなに優秀な魔術師が何十人がかりでかかつても破れないよな結界が張つてあるのよ。到底わたくしたちには破壊できっこないわ」

「そうか。でも遠坂は普段つて言つたよな」

「ええ」

「それはどういう意味だ?」

「実は聖杯が起動しあじめると大聖杯も起動をはじめるの。そのときに結界があつては大聖杯と聖杯が影響し合つことができなくなるから、聖杯起動時のみ大聖杯の結界はなくなるのよ」

「つまり、聖杯起動時が大聖杯破壊の唯一のチャンスつてわけか」

「ええ」

聖杯の起動が大聖杯破壊の絶対条件となる。やはり、聖杯戦争で俺たちが勝ち残らなければならぬことか。

「ところで、聖杯の起動つて何体ぐらいのサーヴァントを倒せばいいんだ。やっぱり6体か？」

「いいえ、それなりのマナが聖杯に溜まれば聖杯は起動しあげると思うわ。そうね、だいたい4体以上かしらね」

「4体か……。俺と遠坂のサーヴァントを除いて残るは5体。その内4体を倒せばいいというわけか」

「最低線がその辺りでしょうね。簡単にはいかないと思つわ

「やうだな。まあ、敵の強さにも依るけどな」

「その点なり、今回の聖杯戦争はわたしたちが有利かもしれないわね」

「なんどさ

「前回の聖杯戦争と今回の聖杯戦争は間隔が短すぎるでしょ。それならば、マスターだつて聖杯戦争の準備を整えることができない。それに前回の聖杯戦争でマスターだつたイリアスフイール・葛木・エセ神父は死んでしまったし、慎一も聖杯戦争に参加できるほど体が回復していない。実質前回の聖杯戦争を経験しているのはわたしたちだけなのよ。よつて、今回のマスターはわたしたちを除いて新参者である可能性が高い」

確かに遠坂が言つ通りになれば、俺たちは俄然有利な立場にいることになる。

「ただ、聖杯戦争は必ずしもそう上手くいくものでもない」

「ええ、その通りよ」

前回の聖杯戦争、最後こそは帳尻を合わせることができたが、俺たちの予想することが的中することはほとんどなかつた。自分たちが相手の裏をかこうとするならば、相手も然りというわけだ。戦争は騙し合いだと彼の孫子も説いているが、まさにその通りだと実感した。やるかやられるかの命を賭した戦いにおいて、一瞬の気の緩みが死に繋がりかねない。不測の事態に常に備える姿勢を忘れてはならないのである。

「ともかく俺たちはマスターに選ばれたんだから、相手が誰であれ全力で迎え撃つしかない。そのためにも万全の準備を整える必要があるな」

「そうね。しかし、なんでこの時期に聖杯戦争が起つるのよ。今までの聖杯戦争は常に冬だったって父さんの手記には書いてあつたし、本来の聖杯戦争の周期は60年なのよ。いつたい何なの今回の聖杯戦争は、季節は春で前回の聖杯戦争が終わつてから2ヶ月ぐらいしか経つていないじゃないの」

「そうだよな。あまりにも聖杯戦争が起つるにしては間隔が短すぎる。

「でも、第4次聖杯戦争と第5次聖杯戦争の間隔もたつたの10年だろ。周期の話をするなら前回の聖杯戦争でとつぐに狂いはじめて

るんじゃないのか?「

「やうじえはそうね……あのときわたしは周期が早まってラッキーとしか思わなかつたけど……周期か。通常が60年、前回が10年、今回が2ヶ月。これもしかして……」

遠坂の表情が一層険しくなつていく。

「遠坂、何か分かつたのか」

「……ええ。もしわたしが考えたことが正しことすると、非常にまずい事態が起つてゐるかも知れないわ」

「説明してくれるか」

「少し待つて、整理がついたらゆづくつ説明するわ」

「わかつた。それなら俺は弁当の用意をしてくるよ」

「ええ。お願ひ」

## 大聖杯

昼食を食べ終わり、遠坂の話を聞くべく茶と紅茶を用意して居間に腰を下ろした。

「話は纏まつたよな、遠坂」

「ええ。事実かどうかは分からぬけど、信憑性が高い話にはなつたわ」

「話してくれるか?」

少しの間をおいてから、遠坂は説明をはじめた。

「大聖杯の役割には、マスターの選定とサーヴァント召喚用のマナの収集があることは話したわよね。後者の方なんだけど、通常サーヴァント召喚に必要なマナを集めるには60年の年月がかかるのよ

サーヴァント一体を召喚するだけでも莫大なマナを集める必要がある。60年というのは妥当な数字だろう。

「それにもかかわらず、第4次聖杯戦争と第5次聖杯戦争の間隔は10年しかなかつた。これはどうしてだと思う?」

60年かかるものが10年でできてしまつとなると……

「なんらかの要因、例えばアンリ・マコが原因で周期が早まつたとか……」

「ええ。わたしもはじめはそう考えていたわ。でも、それだと前回と今回の2ヶ月という周期がどうしても説明できないのよ。いくらアンリ・マコが大聖杯のマナ収集能力を向上させてるとしても、2ヶ月でサーヴァント7体分のマナを集めるなんて不可能なのよ」

なるほどな。確かに10年だつたら可能性はあるかもしれないが、2ヶ月はさすがに無理だよな。

「それなら、どうやって集めているんだ？」

「そうね。じゃあ、それを説明するために簡単な問題を出すわ。通常の聖杯戦争の周期が60年だとすると、大聖杯が1体分のマナを集めるために何年くらいかかるでしょう？」

60年でサーヴァント7体分のマナを集めるわけだから……

「だいたい8年と半年ってところか？」

「正解。それなら、第5次聖杯戦争をはじめるにあたつて、大聖杯が集めたマナの総量はさつきと同じようにするとサーヴァント何体分になるでしょう？」

1体が8年と半年かかるわけだから……

「1体分とちよつひとつといふか」

「そういうこと。それじゃあ、今回は？」

「まあ、1体分も集めてないよな」

「やつ、それがわたしの出した推論を導いたためのヒントよ。どう、何かに気づいた？」

遠坂が言つていたことを纏めると、通常大聖杯がマナを集めの周期は60年で、それを1体あたりに換算すると8年と半年ほどになる。第4次聖杯戦争と第5次聖杯戦争の間隔は10年だつたため、先ほどの計算だとサーヴァント1体とちょっと分しかマナを集めていることにはならない。それが第5次と今回だと、1体分にも満たないか。……これだけじゃ、遠坂が何を言いたいのか分からないな。

「悪い。まだ、わからない。もつ少しヒントをくれないか」

「やつね。なら、とつておきの大ヒントをあげるわ」

「……遠坂にしては、やけに優しいな」

「アンタね。やつでもしなきゃ、日が暮れるでしょ」

ぐつ……やすがに今のは堪える。

「落ち込んでるんじゃないわよ。それなら、次のヒントで『気づきなれ』」

「よし。望むところだ」

「わたしも詳しいことは知らないんだけど、第1次から第3次聖杯戦争までは遠坂・マキリ・アインツベルンの三者が一步も譲らずに長期化して、聖杯の召喚は試みたらしいんだけど結局聖杯が発動しないまま終わつたらしいの。でも、第4次聖杯戦争は違つた。その

違ひは分かるでしょ」「

「セイバーがマスターの命令で聖杯を破壊した」

「そう。そして、その際に言峰綺礼のサーヴァントとして現界していたギルガメシュは、聖杯を浴びて現世への受肉を果たした」

その10年後、第5次聖杯戦争が勃発することとなる。

「……そうか！－第4次と第5次聖杯戦争の周期は10年。大聖杯が10年分のマナを集めたということは、逆に大聖杯には10年分のマナが不足していたと考えることができる」

「そうよ。その不足分っていうのが金ぴかだと考えれば、全ての辻褷が合づるわ」

「ちょっと待て、遠坂。確かに10年分のマナがギルガメシュのマナ量かもしれないことは分かる。だけど、それなら大聖杯は残りの50年分のマナをどうやって集めたっていうんだ？」

「さつき士郎は、第4次聖杯戦争とそれまでの聖杯戦争の違いは、セイバーが聖杯を壊したことだって言つたわよね」

「ああ

「つまりそれが答えなの。セイバーが壊した聖杯の中には、5体分のサーヴァントの魂が保管されていた。それをセイバーが破壊した。すると、聖杯の中に集まっていたマナとセイバーの分のマナは行き場を失った。そのため、聖杯が起動により聖杯とバスが繋がつていた大聖杯に行き場を失ったマナが一斉に流れ込んだ。それがギルガ

メシュ分のマナ量を除いた50年分のマナに相等するってわけ

そして、大聖杯は不足分である10年分のマナを集めるだけで済んだってことか。

「なるほどな。だけど、それがたまたまそう説明できるって可能性はないのか」

「ええ。今の説はあくまでわたしの推論だから、絶対に正しいという保証はないわ。でも、前回と今回の間隔を考えると余計に信憑性が高くなると思わない？」

前回の聖杯戦争は第4次聖杯戦争と同様、セイバーが聖杯を破壊することで決着している。さらに、第4次聖杯戦争後も尚現界し続けたギルガメシュも俺との戦いの後、黒い孔に飲み込まれ消滅した。「セイバーが聖杯を壊したことによってサー・ヴァントフ体分のマナが行き場を失つたにもかかわらず、加えてギルガメシュのマナも大聖杯に流れ込んだってことか。ゆえに、大聖杯が貯蔵したマナはサー・ヴァント8体分。つまり、その時点でいつでも聖杯戦争ができる準備は整つたというわけか」

「そういうこと。そして、この推論が正しかったとしたら事態は一層深刻になつてくるわ」

「聖杯を破壊しても行き場を失つたマナは大聖杯に戻つてしまつ。そして、聖杯はアンリ・マユに汚されている」

「そつ。だからわたしたちが大聖杯を壊すか、聖杯が願望機としての役割を果たすかしない限り、延々と聖杯戦争は続くことになる。

だけど、聖杯を壊せば溜まっていたマナが大聖杯に全て戻ってしまふから聖杯を壊すわけにもいかない。しかし、誰かが聖杯を完全に発動させてしまえば、アンリ・マユは復活し、人類滅亡の危機に瀕するかも知れない」

「……責任重大だな」

「……ええ」

ただそれではっきりしたわけだ。

「これで俺たちがこの聖杯戦争を黙つて見守るわけにもいかなくなつたつてわけだ」「

「そうこうになるとこなるわね」

「なら、さつさも言つたように俺たちは全力を出し切れるよつて今は万全の準備を整えるのみだ」

「いい心構えね。それでこそわたしのパートナーにふさわしいわ

「ああ。とにかく聖杯戦争が始まるにあたつて必要な」とは今日中に済ましちまつたほうがいいな」

「ええ。そうと決まればさつそくはじめましょう」

「さうだな。でもまあその前に、お茶のおかわりをもつてくれるか

「あつ、わたしのもお願い」

こうして一人の第6次聖杯戦争は幕をあけたのだった。

## 理想

「なあ遠坂、今回は誰を召喚するつもりなんだ」

聖杯戦争がはじまるとなると、最も大切なのがサーヴァントの召喚だ。

「セイバーに決まってるじゃない」

「なっ！待ってくれ、セイバーは俺が召喚するから、遠坂は他の人にしてくれないか」

「嫌よ。セイバーは士郎が召喚するよりもわたしが召喚した方が絶対にいいもの」

「なんでさ？俺は前回のセイバーのマスターなんだから当然今回だって俺が召喚するべきだろ」

「それを言つなら、わたしもセイバーのマスターだったわよ。それに、わたしがセイバーのマスターになつたからわたしたちが前回の聖杯戦争の勝者になつたんじゃない」

「うつ。確かにそうかもしれないが、やつぱりセイバーのマスターだけは譲れない」

「ふざけるのもいいかげんにしなさいよ。さつきも言つたように今回の中の聖杯戦争は絶対に負けるわけにはいかないの。セイバーはわたしが召喚するわ」

「こへら相手が遠坂でもそれはさせない。遠坂がどうしてもって言うなら、じつにだつて考えがある」

「なによ。言つてみなさいよ」

「遠坂の分の聖遺物は投影しない。それに、俺はお前の彼氏はやめて、聖杯戦争が終わつたら世界中の困つてる人を助けるべく、旅に出ることにする」

それほど俺の決意は固い。

「つぐー！卑怯よ、士郎ー！」

「卑怯でもかまわない。それでも俺はセイバーのマスターだけは譲れないんだ」

「なによ、なによ。セイバー、セイバーって。わたしのことなんてどうでもいいのね」

遠坂はそっぽを向いたまま顔もあわせてくれない。

「なんですか？俺の一一番は天地がひっくり返つても遠坂だ。俺は誰よりも遠坂を愛している」

「そんなの、言葉ではなんとも言えるわよ。どうせアンタがセイバーを召喚したら、セイバーは士郎にべつたりで、アンタはセイバーにべつたりになるじゃない」

さうかそれが遠坂の本音だな。

「遠坂、俺の一番は遠坂だつて言つてるだろ。俺がセイバーを召喚してもそれは絶対に変わらない」

「わたしがアンタにとつての一一番なら、士郎はどうしてセイバーにこだわるのよ」

「俺がセイバーにこだわっているのは、なにも遠坂よりセイバーのほうが好きだからってわけでは決してない。俺は前回の聖杯戦争でセイバーに何度も助けられた。だけど、俺はセイバーに何一つしてやることができなかつた。自分のことで精一杯だつたっていうのは単なる言い訳にすぎないとと思う。俺はセイバーの抱える苦悩をひとつ解決してあげてないんだ。もちろん、遠坂だつてセイバーの苦悩の正体には気づいていると思う。だけど、その苦悩を和らげてあげることができるのは同じ悩みを抱き続けてきた俺しかいないと思うんだ。なにもそれは遠坂がセイバーの気持ちをわかってないと言ってるわけじゃない。遠坂が、セイバーのことを大切な存在だと思ってることは俺が一番わかってる。それでも、俺が自身の理想を信じる限り、セイバーを放つておくことはできないんだ。すべての人を助けたい、できることなら誰にも死んでほしくない。そんなことを願うのは、偽善だつてことぐらいはアーチャーと戦う前からわかつてた。それでも、俺は自身の理想を信じて、アイツに勝つた。だから、同じ理想を抱いているセイバーを放つておくわけにはいかない。セイバーの抱いている理想は、俺のものよりも歪なんだ。彼女から直接聞いたわけじゃないけど、俺は彼女の理想を知つてゐる。あの丘の上で、理想のために己が身を犠牲にした彼女の姿を知つてゐるわけにはいかない。彼女が抱いた理想は決して間違つてなどいない。間違つてゐるのは、理想のために何かを犠牲にしようとする考へだ。自身を犠牲にして、他者を救つたところでそれは全員を救つたことにはならない。自分という犠牲者が生まれる。そのことに俺

は今まで気づかなかつた。自分はいなものだと思っていたから。自身の命なんて他者の命に比べたら無いに等しかつた。だけど、それは間違つた考え方だとあの戦いを通して識ることができた。遠坂凜とこうかけがえの無い存在ができたことで俺の考えは間違つていたんだと思い知らされた。俺が死んではだめなんだということを、俺は死にたくないんだということを、俺は生きていきたいんだということを思い知らされた。俺が死んだら、遠坂を悲しませることになる、そして遠坂を幸せにしてやることができなくなる。そんなの嫌だから、俺は簡単に死ぬことなんてできない。俺は遠坂のおかげでそれに気づくことができたんだ。そして今度は、俺が手にしたこの感情を、セイバーに俺自身の力で伝える番なんだ。この大切な感情を一生忘れないために、俺がセイバーに伝えなきや意味がないんだ。同じ理想を抱いて、同じ苦悩を抱える者として、俺が伝えなければいけないんだ。そのためには、セイバーのマスターでなければ駄目なんだ。頼む遠坂、俺が無理なことを言つてることはわかってる。それでもセイバーのマスターだけは譲れない。俺にセイバーのマスターをやらせてほしい」「

「衛宮くん。あなたにセイバーを任せて、セイバーを泣かせるなんて結果になつたら許さないわよ」

「」の言葉に対する返答が最終試験つてわけだな。

「遠坂、その言葉にはうんとは頷けない

「」

「俺はセイバーを泣かせてみせる。とびつきりの嬉し涙を、アイツには流させてやりたい。それが、今まで頑張つて來た彼女へのせめてもの報いつてヤツだろう?」「

遠坂はしばし無言のまま俺を真剣なまなざしで見つめていた。

「いいわ。合格よ。アンタをセイバーのマスターとして認めてあげる。そのかわり、失敗は許されないわ」

「ああ、わかってる。俺は遠坂と違って、大事なところで失敗をしたりなんかしないからな」

「さっきの言葉、取り消すわよ」

「取り消したって、俺はセイバーを召喚するからな」

「……もう、勝手にしなさいよ」

そう言つ遠坂の言葉には棘がなかつた。俺への信頼と、遠坂なりのホール気持ちが詰まつた優しい言葉だつた。

「それで、遠坂は誰を召喚するつもりなんだ？」

「アンタにセイバーを譲つたから、まだ決まってないわよ」

心底不満そうに遠坂はそう答えた。

「俺はセイバーのマスターを譲るつもりはないぞ」

「わかつてゐるわよ。そうね、ランサーにしようかな？」

アーチャーじゃないのか？

「アンタね、アーチャーを召喚するわけないでしょ」

「俺今、口にだしてたか？」

「口で言つてなくとも、顔に書いてあるわよ」

「う。やつやどりこむひなこ」。

「でもどうしてアーチャーにしないんだ?なんだかんだ言って、遠坂とアーチャーは息が合つてただろ」

遠坂はため息をつき、答えた。

「アンタはわたしがアーチャーを召喚していいわけ？」

そりゃよくないけど……

「それに、魂の起源は同じでも、前回召喚したアーチャーと今回召喚するアーチャーは全く別の存在なのよ。そんなヤツを召喚したら、またアンタ達は殺し合ひをはじめるでしょ」

言われてみればその通りだ。

「悪い。俺が浅はかだった」

「分かったのなら、もう俺の話はいいわ。それより、わたしがランサーを召喚しようと思つただけで、士郎はまだいつの間にか遠坂

「ランサーか……

「いいんじゃないか。アイツナつうひ……こーやつだったし」

そう言つ俺の顔を、遠坂はじつとのぞき込んできた。

「あれ？ 士郎もしかして焼餅焼いてる？」

「なつ。そんなことはないぞ、決して……」

「そつ？ でも少しほは妬いてくれてるんでしょ」

卑怯な……。頬をつむぐやつら赤らめながらそつ聞かれたら、本当にことを語らわせるを得ないだろ。

「…………ああ。やつだよ」

「えへへ。けつじんの嬉しいかな……」

……遠坂、その反応は反則だ。

「でも、アンタだってセイバーを召喚するんだから、わたしがランサーを召喚することぐらい我慢しなさい」

「そっ……やうだな」

セイバーを元々召して出されでは、やうやく答えるしかなかつた。

「とにかく、士郎」

「なにやっへ。」

「なんで士郎の周りにはかわいい女の子が多いのよ」

遠坂の突然の言葉に、俺は言葉を失つてしまつた。

## 買い物

「しかし、沢山買つたな」

「そうね。最近は食事も2人か3人の時が多くつたから、あまり買い物をしなくても済んだのよね」

「そうだな。でもまあ、俺は賑やかの方がいいかな……」

聖杯戦争の話が一段落ついた後、俺たちは「近所の商店街で買い物をした。聖杯戦争が始まってしまえば、買い物なんて行つてる暇はありませんだろうということ」で、食材やら生活用品を思いつく限り片っ端から買つていったのだが、気がつくと俺の両手は大変なことになつていた。まあ、聖杯戦争の話が終わつて、なぜか遠坂に俺の周りの女の子がかわいいことについて詰問され、困り果てた挙げ句に無理矢理買い物に連れ出したので、遠坂の荷物が軽いことについては何も言えないのだが……。

「そういえばさ、士郎。藤村先生なんだけど、この先1週間くらいは来てもらわない方がいいわね」

「ああ。それなら、メールを打つておいたよ。『藤ねえも年度初めはいろいろ忙しいだらうからこれから1週間くらいはそのまま家に帰りなよ』って送つたら、『なんか、お姉ちゃん避けられてるみたいで淋しいけど、士郎の言葉に甘える』ことにする『ひつて返ってきたから藤ねえなら大丈夫だと思つ

「……アンタ、そういうことは本当に『が』が利くわね」

なんか、褒められてる気がしないのは気のせいかな?

「藤ねえは前回の聖杯戦争に巻き込んじまつたからな。今まで危険な目に遭わせるわけにはいかないんだ」

身内の存在というのは聖杯戦争では弱点となつてゐる。前回の聖杯戦争では、キヤスターにそこを突かれて痛い目にあつた。同じ失敗を繰り返すわけにはいかない。

「土郎も少しばマスターとしての自覚があるのね」

「当たり前だろ。俺たちは絶対にこの聖杯戦争で勝ち残らないといけないんだ。それに、家族を危険な目に遭わすわけにもいかないだろ」

俺は遠坂の方に顔を向けていた。

「もちろん、遠坂も俺の家族の内に入つてるからな」

「言つた。言つてやつた。たぶん俺の顔は真つ赤になつてゐるに違いない。

「それなら、絶対に無茶はしないよつ」

「うひ……痛いとこ突くな、遠坂」

「どうせアンタのことだから、無茶するなつて言つたつて無駄なことは分かつてるとこ、わたしのことを本当に大切に想つてくれてるなら、絶対に死ぬんじゃないわよ」

「ああ。分かっているさ。俺は死ないし、遠坂も死なせない。そして、救える人は全員救つてみせる」

それこそが俺の理想。偽善だつて言われようと、俺はこの理想を生涯貫いてみせる。そしてこの聖杯戦争を、その第一歩としてみせる。

「まあ、そのためにもまずはサーヴァントの召喚をしなきゃならなかつたんだが、召喚つてどうやるんだ？」

「はあ？」

睨まれた。

「いやだからさ、俺は正規の召喚の仕方を知らないんだ。だからその、教えてくれるとありがたいんだが……」

「そうだった。アンタは儀式もせずにセイバーを召喚したんだったわね」

「うう……すまん」

「謝つてどうするのよ。まあ、ぶっちゃけると儀式に必要なものは魔法陣と聖遺物と呪文詠唱だけだから、士郎は聖遺物の投影と短い呪文を覚えてくれるだけでいいのよね。魔法陣はわたしが描くから」

「そうか、それなら安心だな。……といひで、召喚用の聖遺物つて投影品でもいいのか？」

「いいのかつて、そんなことわたしにも分からぬわよ。それでも、

今から聖遺物を集めるわけにもいかないんだから、投影品を使つしかないじゃない

確かにそうだ。

「わかった。それなら俺はできるだけオリジナルに近いものになるめでたしに努力するよ」

「ええ。その辺は士郎を信じるわ

「ああ。まかせとけ」

やつらの話している内に俺たちは衛宮邸に戻つてきた。さて、聖杯戦争の準備を本格的にはじめるとしますか。

町に点在する人工の明かりが一つ、また一つと消えていき、深遠な闇が辺りを覆い始める。

深夜1時、静寂が町を支配するなかで、一画のみ張り裂けんばかりの緊迫した空気を纏う空間があつた。

「閉じよ、閉じよ、閉じよ、閉じよ、閉じよ

繰り返すつどに五度

ただ満たされる刻を破却する

衛宮邸内、中庭の中心に一人の青年が月の光に照らされ、立っている。

「同調開始」

彼の言葉に反応するように、辺りの木々達がざわめきだす。

「告げる

汝の身は我が下に、我が運命は汝の剣に  
聖杯の寄るべに従い

この意、この理に従うならば答えよ

魔力の奔流が青年の軀を襲う。それでも彼は、伝説の騎士王との再会を確信し、さらなる詠唱を紡ぎだす。

「我は常世総ての善と成る者  
我は常世総ての悪を敷く者」

一陣の風が舞う。刻は満ちた。

「汝三大の言靈を纏う七天  
抑止の輪より来たれ  
天秤の守り手よ」

「問おう。貴方が、私のマスターか」

闇を弾く声で、彼女は言った。

## セイバー(?)

「問おう。貴方が、私のマスターか」

闇を弾く声で、彼女は言った。

「ああ。俺が君のマスターだ、セイバー」

「召喚に従い参上した。これより我が剣は貴方と共にあり、貴方の運命は私と共にある」

俺は固唾を飲んで彼女の次の言葉を待つ。そして……

「…………に契約は完了した。…………お久しぶりです、シロウ」

俺のよく知るセイバーが目の前に立っていた。

「会いたかった。……セイバー」

「私もです。……シロウ」

そのまま、二人で抱擁を交わす。

「…………」

気づくと、俺の後ろの空気がギンギンに冷え切っていた。

「あんたら、いつまでそうしてゐわけ？」

……」「怖い。

「いやつ、すまんセイバー。つい……」

「いえ、その私こそシロウの姿を見たら、体が勝手に動いてしまいました……」

……遠坂の視線が痛い。

「……で、いつまでそうしてるわけ？」

「これは、まずい。とにかく俺たちは体を離した。

「凛、会いたかった。シロウも凛も元気そうでなによりです」

「ええ。そうね。貴方もマスターとの距離をずいぶんと縮められたようになによりだわ」

「ふ……この空気はまじでやばい……

「まあ、何がともあれセイバーの召喚には成功したみたいだな」

「そのようね。衛宮くんが思わずセイバーに抱きついてしまうほど、手応えのある召喚だったようね」

……逃げ場がない。

「……まあ、今回だけは大目に見てあげるわ。わたしもセイバーに会えて嬉しいし」

「……凜」

よかつた。なんとか、俺は死なずに済むようだ。まあ、遠坂とセイバーは結構仲がよかつたしな。セイバーに感謝といったところか……。

「そういうわけだからセイバー、これからよりよろしくね。今回の聖杯戦争は、前回以上に貴女の力が必要なの」

「ええ。確かにこの聖杯戦争はどこか歪だ。嫌な予感がしてならないのです」

セイバーのクラスの直感は、未来予知に近い能力である。ゆえに、セイバーが感じている嫌な予感は、簡単には看過できない。

「やはり貴女もそう感じるのね。詳しい話は後でするけど、この聖杯戦争は未知の部分が非常に多いのよ。なにが起こるか、わたしには想像もつかないわ」

「そうですね。それでも、私が召喚された限りは貴方がたに必ずや勝利をもたらしましょう」

「そうね。期待しているわ」

「ええ。必ず貴女がたの期待に応えてみせます」

セイバーの言葉は自信に満ちあふれていた。

「本当にセイバーなんだな」

「シロウ、どうしたのですか」

「いや、ここにいるセイバーはあのときのセイバーと同じなんだな  
と思つてさ」

「…………」

「そういえばそうね。英靈つて、座にある本体から呼び寄せられる  
分身のようなものって聞いたから、人格は毎回違うものだと思つて  
たけど」

「ええ。私は普通の英靈ではないのです。英靈となるには代償行為  
が必要なのですが、私は自身が英靈となる代わりに、私が生きてい  
る内に聖杯を手に入れることを望んだのです。そして、聖杯を手に  
入れ、私の願いが叶つた際は、守護者となることを受け入れると誓  
つたのです」

「今の説明だと、セイバーが普通の英靈でないといつのがよくわか  
んないんだけど」

「はい。死後、守護者として世界に使役されることはある」と  
です。しかし、私は未だに死んでいない。私の人生は、死を迎える  
一瞬で止まっているのです」

「……カムランの丘だな」

セイバーは驚いた表情をする。それも分かる。彼女は前回の聖杯  
戦争で最後まで俺に真名を告げなかつた。しかし、俺の口から出た  
言葉は、彼女の真名を知らなければ出ない言葉だ。

「……シロウ。貴方は私の真名を知っていたのですか？」

「いや、知っていたと言えるほど確かだつたわけじゃないよ。ただよく、セイバーの過去を夢に見たんだ。だから薄々、セイバーはアーサー王なんじゃないかと思つてた。やつと、今のセイバーの反応を見て、俺の予想が当たつてたことを確信した」

「そうですか。私はシロウが言うとおり、アーサー王と名乗り、男と偽つてブリテン王国を治めていました。しかし、最終的にわたしは……」

血塗られた丘。剣と死体の山と化した丘の上で、彼女は誰にも看取られることなく息を引き取つた。

「つまり、貴女は生者まま、世界と仮の契約をして聖杯を求め続けていいるというわけね」

「……はい」

「それは、貴女が聖杯を手に入れるまで、死ぬことができないことを意味してないかしら」

セイバーは言葉を失つた。それこそが、今の遠坂の言葉を肯定したことにつながる。

「ゆえに、貴女は靈体化ができなかつた。貴女は英靈として世界に使役されながらも、生者だつたから」

セイバーは何も話さない。その沈黙が、全てを語つていた。



セイバー（？）（後書き）

- \* - \* - \* - \*

やつと、セイバー召喚の所まで来ましたね。最初は説明が長々と続いていると思いますが、結構重要な話なのです。

とあるんですね。なんで、ちょくちょく移設していくと思います。

さて、私のサイトにて

faith 「一步」更新

しました。（現段階では『すると思います』なんですか……）

## セイバー（？）

「セイバー、お前は一度あの丘に戻ったのか？」

「ええ。私の聖剣により聖杯を破壊した後、私はあの丘に戻りました。そして、最期を迎えるようと思つていました。しかし、世界は私を許してくれようとはしなかつた。刻は決して進むことなく、私はまたシロウに呼べて、この時代にきました」

「そうか。しかし、セイバーも前回の聖杯戦争の記憶があるならば、もう聖杯は汚れてしまつてることを知つているはずだ。ならばお前は、何を求めてここに来た？」

「シロウ、それは貴方であれば私に聞かなくても分かるはずだ。私は聖杯を破壊しにきました」

答えは分かつていた。しかし、それでは……

「それではお前が救われない」

セイバーは、聖杯を手に入れない限り、英靈として世界に使役され続ける。それも、永遠に最期を迎えることなく。

「お前が聖杯を破壊するのは、自分で自分を苦しめるのと同じじゃないか。お前は、王として立派に国を治めてきた。しかし、最終的には国を滅ぼすことになつてしまつた。その責任を取つて、お前は国のために自身を世界に捧げるという決意をした。そしてお前は俺たちの時代に呼ばれ、聖杯を手に入れるべく戦つた。だが、お前が求めていた聖杯は既にアンリ・マユに汚染されていることが分かり、

「己の手で破壊することになった。それでも、お前はあの戦いを通して、俺とアーチャーの戦いを通して、気づいたんじゃないのか。自分は間違っていたと気づいたんじゃないのか。そうでなければ、いくら汚れた聖杯とはいえ、お前が聖杯を壊すわけがないだろう。セイバーは、聖杯を諦めて、前に進むことを選んだはずだ。それにもかかわらず、世界がお前を許さなかつただと。それに加え、お前は聖杯を破壊すべくこの時代に再び来ただと。……ふざけるな。なぜ今まで苦しみ続けてきたお前が、これ以上の苦しみを与えるられなければならないんだ。そんなのおかしいだ。お前が報われないなんて、そんなの間違ってる」

「……シロウ。貴方の気持ちは嬉しい。しかし、それでも私は聖杯を破壊する。私が聖杯を手に入れることよりも、貴方達の住むこの世界を守る方が大切ですか？」

前の俺なら、ここで黙ってしまったと思う。しかし、今の俺は違う。

「お前はそれでいいのか、セイバー？」

「え？」

「それで本当にいいのかと俺は聞いていたんだ」

「はい。私は、貴方達の住む世界を守る。そのために聖杯を破壊することを躊躇つことはありません」

「せうか。ならば、今すぐ遠坂と契約をし直せ」

「…………どういう意味だ」

セイバーの口調が、男のようて厳しいものとなる。それでも俺は怯まない。

「そのままの意味だ。そのまゝが、この戦いを勝ち抜くためには効率的だ」

「ふざけるな。私を裏切るつもつか、シロウーー！」

「俺はお前を裏切つてなどいはずだ。本来、聖杯を手に入れるべくマスターはサーヴァントと契約を結ぶ。しかし、お前は聖杯を破壊するためにこの戦いに望むのだらう？それならば、お前との契約は無効だ。守る必要もあるまい」

「何を言つたか。私はシロウの剣としてこの聖杯戦争を戦い抜くと誓つたのだ。聖杯など関係ない」

「それならば尚更だ。別にお前が遠坂のサーヴァントになつたって、俺の剣として戦えないわけではあるまい。それはセイバーの好きにすればいい」

「なぜそのよつなことを言つのです、シロウーー！」

セイバーは今までに見たことのないくらい激怒している。

「お前のことiga大切だからだよーー！」

セイバーは俺の言葉に呆氣ことられ、立ちつくした。

「俺と遠坂にとつて、お前は大切な存在なんだよ。そんなお前が俺

たちのために自身を傷つけながら戦つてゐる姿を見て、嬉しいわけがないだろうが。お前もアーチャーを見て感じただる。自己を犠牲にしてまで守護者となつたにもかかわらず、後悔しか残つていない男の姿を見て、違和感を感じただる。今のお前はアーチャーと何も変わらない。そんなヤツのマスターなんかに俺はなりたくない。アイツを思い出すのは御免だからな

今のセイバーを見ていると腹が立つ。自分のことなど諦めきつて、他者の犠牲になることで自分を慰めているセイバーなど、俺が許せんはずがない。

「それならば、私はどうすればいいのですかー！」

セイバーは顔を上げず、泣き声で叫ぶように俺に感情をぶつけた。

「それでいいんだ」

「…………」

「やうやつて、俺に想いをぶつけてくれればいいんだ。俺に言えなることは、遠坂に言ってくれてもいい。ただお前が一人で辛い思いをする必要はないんだ。たとえ、お前の未来が絶望的であつても、まだ決定したわけじゃないだろう。それにもかかわらずお前はもう諦めてしまつてゐる。それが許せないんだよ。お前は何の努力もしてないじゃないか。俺たちもお前に何にもしてあげていられないじゃないか。それなのに諦めるのか。まだどうなるかも分からぬのに、諦めてしまつのか。それは、間違つてる。少しでも可能性があるのならば、運命にだつて抗うべきだ。どんなに勝ち目のない戦いでも、戦いが終わるまで戦場を駆け抜けるのが騎士つてもんだろ。騎士王であるお前が、戦いを放棄していいのか。そんな王には、部下

は失望するだらうな

「……シロウ」

「王だけでは國は治められない。それは、セイバー自身が誰よりも知っているはずだ。信頼できる臣下がいてこそ、王は王たりうる。俺じゃあ役不足かもしれないが、セイバーが俺のことを信頼してくれてることを信じてるし、俺もお前を信頼してる。だから、少しは俺たちを頼れよ。なんでもかんでも自分一人で解決しようとしないよ。そんなの悲しいじゃないか。お前が俺の剣なら、俺はお前の鞘になるって思ってるんだからさ」

「シロウ。やはり私のマスターは貴方しかいない。剣と鞘は常に共にあるべきだ。私のマスターとして、この聖杯戦争に参加してくれませんか、シロウ」

「ああ。セイバーがセイバー自身のためにこの戦いに参加するって言つのだつたら、俺は喜んでお前のマスターをやるよ」

「はい。まだシロウの言葉を全て受け入れられたわけではありませんが、私は私自身のためにこの戦いに参加する。そして、納得いく答えを見つけたいと思っています」

「分かつた。それなら、改めて俺のサーヴァントとなってくれ、セイバー」

「喜んでお引き受けしましょ。マスター」

「…………」

「…………」

「遠坂が見てたら怒るだろうな」

「そうですね。凛がいたら怒るでしょ?」

「わたしは」「ここのナビ」

俺たちの後ろには、宝石を構えた赤い悪魔が仁王立ちしてしまった。

「「…………許してください」」

「謝るへりこなら、私の呪喚の準備を手伝いなさいよ」

「「…………はい」」

セイバー(?) (後書き)

- \* - \* - \* -

】 2011.03.20 Fate/stay  
night 「一步」更新

arrow

of

## 惄氣

「遠坂、後は何をすればいい?」

俺とセイバーは、半ば脅迫され、遠坂の召喚準備の手伝いをしている。まあ、自業自得なわけだが……

「そうね。こんなもんでいいわ。ありがとう。……あつ、もう一つだけお願ひしていい?」

「ん?なんだ?」

「強化って、剣以外にもできるわよね?」

「ああ。得意ではないけど、最近は失敗することも少なくなってきたと思つた」

「そりゃ。それなら、強化をお願いしていい?」

遠坂、やけに殊勝だな。

「いいぞ。それで、何に強化をかけばいいんだ?」

俺がそういうと、遠坂は急に顔を真っ赤にして、消え入るような声で呟いた。

「……スカート」

今、俺の理性を奪いかねない単語を聞いたような……

「はい？」

「…………」

とりあえず、聞き直してみよ。さつき聞こえたのは、何かの間違いだらうか？

「もう一回言つて貰へれるか？」

「スカート」

「なんですか？」

ただいま、俺の脳は真っ白です。

「だから、スカートを強化してって言つてるの。召喚中に捲れたら嫌でしょ。今日わたし、ブルマとか履いてないし」

「いや、だからとこつて強化は……」

「なによ。別にスカートを強化するぐらい恥ずかしいことなんて何もないじゃない」

確かに、遠坂とは既にそれなりの関係を築いているわけだが……

「いいのか？」

「いいのよ。早くやつてちょうだい……」

むつ。そのまま俺が躊躇してると、遠坂にガンドでも撃たれかねない。

「わかったよ

意を決して、俺は遠坂のスカートに手を伸ばした。

「きやつ……ちよつと、何するのよ！…」

「何するって、スカートに強化しちゃったのは遠坂じゃないか」「

確かにそう言つたわよ。だから何へこの座じて手は

「手つて、スカートに触れなきゃ強化できないうちうが

「なつ。強化ぐらい物に触れなきゃやりなきこと

それは無理な話だ。

「俺にはそんなことができない。それまで言つんだったら、自分でやら  
ればいいじゃないか。遠坂だつて強化ぐらい使えるんだ

「嫌よ。確かにやつてやれないわけじゃないけど……」

「なんですか？」

「別に、召喚中にアンタの魔力を感じていたいって思つてもいいじ  
やない……」

凄い剣幕で、遠坂はそう叫んだ。

「えっと、その気持ちは実に……なんというか、嬉しいんだが……」

遠坂は我に返ったのか、顔を赤らめ、そっぽを向いて言つた。

「とにかく、土郎に強化をしてほしいのよ」

遠坂にそんな声でそんなことを言われてしまっては、断れる男ではこの世にはいないと思つ。

「わかったよ。それじゃあ、俺のズボンを取つてくるから、それを履いてスカートを脱いでくれ」

……といふか、

「なあ、遠坂がズボンを履けばいいんじゃないのか？」

遠坂はポカーンとしている。

「どうなんだ？」

「……嫌よ。それだと、調子が狂うわ」

「なんだよ、それ」

「もう、わかったわよ。触つていいわよ。わたしのスカートを触つてもいいから、早く強化をかけなさいよ」

それは飛躍しすぎてないか。

「ちゅうと待つた。それはいくらなんでも違つだろ」

「何も違わないわよ。ま、早くしなさい！」

触つてもいいと言われると、なんだか触り辛い。

- 1 -

「なつ。そんなことないぞ。遠坂のスカートを触るくらい今更なんだっていうんだ」

「わかった。……………やる気」

そして俺は恐る恐る、遠坂のスカートに手を伸ばした。遠坂は抵抗しなかつた。

」」」」

俺たちはしばらくの間、お互に見つめ合っていた。突如、背後から殺氣を感じ振り返った。

「シロウ、凛、その格好はなんですか？」

見ると、武装をしたセイバーが剣を構えて立っていた。

「貴方がたは、いつたい何をしているのですか」

そこには遠坂のスカートを触りながら固まっている俺の姿があつた。

「強化の練習だ」「強化の練習よ」

俺たちは開き直つていた。

「言い訳は聞きますん！！」

瞬間、俺たちは神々しいまでに眩い光に包まれた。

「嬢ちゃんがオレを呼んだマスターか？」

漆黒の闇の中、青の槍使いが赤の魔術師に問い合わせる。

「やうよ。これからよろしく、ランサー」

「まあ、嬢ちゃんなら文句はないぜ。この坊主はオレに文句がありそうだがな」

相手にすれながらかわれる。口は黙つて置くのがベストだろう。

「そんなことよりも坊主、ヤツとの決着はついたのか」

「ランサーがいうヤツとは、おやじくアーチャーのことだらう。そう言えば、ランサーは俺とアーチャーの死闘の結果を知らないんだつたな。

「ああ。俺がアイツを倒した」

「そいつはよかつた。坊主と嬢ちゃんに蟻りがあると、口もやりにくいからな」

「ちよつと待つてランサー、アンタ前回の聖杯戦争の記憶があるの？」

遠坂が慌てて会話に入ってきた。

「あるか」「あ

「ビリーハーと。アンタもセイバーみたいに輪を外れた英靈なわけ?」

「違うな。オレは普通の英靈だ。だが、なんつか前回の聖杯戦争の記憶は残ってるけどな」

「なら、アンタはあのときのランサーと同一人物ってわけか」

「まあ、やうこりとだな」

「ビリーハーとなの?」

遠坂は相当混乱してくるようだ。

「オレにはよく分からなければ、一つ言えることはオレがまだ座に戻つていなすことだ」

普通、特定の時代に召喚された英靈は、自分の意志云々とは関係なく、魂が一旦座に戻ることになつてゐる。しかし、ビリーハランサーの魂はこの時代に残つていたようだ。

「それは関係ないわ。ランサーの魂が座に戻ろつが戻るまいが、召喚されるランサーは座から呼び出されるはずだもの」

「普通だつたら嬢ちゃんの言つとおりかもな。しかし嬢ちゃん、オレを呼ぶときの触媒が特殊だつたの?」

「ランサーを召喚する際に使つた触媒は、俺が投影したゲイボルクだ。

「『』のゲイボルクにはおかしなところはないはずなんだけだな……」

投影した際の感触は、最高の物だった。

「いや、小僧の投影は完璧だろうさ。オレが言いたいのは、そのゲイボルクが坊主の投影した物だからオレが呼ばれたってことだ」

「わからないな。俺はランサーの使つてたゲイボルクを、なるべく本物に近づけて投影したつもりなんだけど……」

「そうか。そういうことね」

「どうやら、遠坂が謎を解いたようだ。」

「分かったのか？」

「ええ。おそれらへ原因は十郎の投影でしょ?」

「なんですか?」

「理由は簡単よ。アンタは誰を思い浮かべてゲイボルクを投影した?」

「もちろんランサーだけど……」

「そのランサーって、アンタが一度殺されそうになつて、キャスター達を倒す際にわたしたちが協力関係を結んだランサーのことよね」

「ああ。俺が思い浮かべたゲイボルクの持ち主はそのランサーの間違いないけど……」

「ランサー、貴方もそのランサーで間違いないわね」

「やつこつことだ。嬢ちゃん達が召喚したのは、英靈としてのオレそのものではなく、第5次聖杯戦争に参加したオレってわけだ」

なるほど、それなら納得がいく。疑問も解決したといひどと一言呴いてから、ランサーは次の言葉を放った。

「ともかくだ。嬢ちゃんならマスターとして不足はない。オレが存在する限り、嬢ちゃんのサーヴァントとしてこの聖杯戦争を戦い抜くことを誓うぜ」

「ええ。わたしのほうからもお願ひするわ」

「よし。契約は完了した。あとの細かいことはいらないだろ」

「そうね。士郎もそれでいい？」

「…………」

黙つてる俺を見て、ランサーは笑い出した。

「おもしれえな坊主。安心しろよ。オレは嬢ちゃんに手を出したりしねえよ」

…………やつぱりコイツ、気にくわない。

「オマエたちの仲を壊すとしたが、オレじやなくそのセイバーを警戒すべきなんじやないか？」

「どうこの意味です、ランサー……」

突然話を振られ、セイバーは怒り出した。

「貴様は、そここの坊主のことが好きだろ？」

「なつ……シロウはマスターであつて、決してそのような感情は抱いていない」

「アンタらね。わたしはセイバーが士郎のことが好きでもかまわないわよ。というか、そんなこととつぶに気づいてたし。それに、いぐらセイバーとは、士郎は渡さないから」

さりげなく遠坂は俺の脳天を突き破る発言をしてくれやがった。

「ホントおもしれえなオマエらば。こつや、退屈しないかもな

実際に満足げな表情のランサーが、俺たちを見つめていた。

## 荒野

そこは見覚えのある風景だった。

「ここに来るのも2ヶ月ぶりか」

一面の荒野に、無数に刺さる剣の数々。燃えさかる炎と空間に回る歯車。

「俺の世界なんだよな」

衛宮士郎の心象世界。魔術師はこの世界のことを固有結界と呼ぶ。魔術の中でも大禁呪であるとされ、協会に見つかれば間違いなく封印指定を受けるほどの大魔術である。

「固有結界か」

俺は自身が固有結界を有していることに第5次聖杯戦争を通して気づいた。その戦いでアーチャーとして現界した英靈エミヤシロウ。ヤツとの戦いを通して、俺はこの心象世界を理解し、足を踏み入れた。

『なぜ貴様はここにいる』

荒野の先に一人の男の姿があった。白髪に茶色の肌をして赤い外套を纏つた長身の男。

「お前が呼んだんじゃないのか?」

衛宮士郎の未来の姿、英霊HIIヤシロウ。

『知らないな。貴様が勝手に来たのである。そもそも、オレが貴様に自分から会いに来るはずがなかろうが。今も理想を貫き、偽善を続けている貴様など田障りにもほどがある』

相変わらず、会つだけで腑が煮えくり返るほどムカツク野郎だ。

「俺も自分から来たわけではない。迷い込んだだけだ」

『はつ。もし、貴様が自分から來たなどと言えば、オレは今すぐ貴様を殺すだろ?』

そう言つとヤツは俺に背を向け、歩き出す。

『理想を抱くのならば、対岸まで泳ぎ切つて見せろ』

ヤツはそれだけを言い残し、立ち去った。

「言われなくともわかってるさ。お前が叶えられずにあきらめた夢は、俺と遠坂が必ず叶えてみせる。たとえ偽善だと罵られようとも、俺は自分の理想を貫いてみせるさ」

強い決意を胸に、俺は自身の世界を後にした。そして、遠坂のいる現実の世界で第6次聖杯戦争一日目の朝を迎えた。



## 朝の鍛錬

「…………ん」

窓から差し込んできた日差しで目を覚ました。

「…………よつと。まだ5時半か」

外を見ると日が昇つたばかりなのか、まだ仄かに薄暗かった。

「わいと、朝ご飯の準備をするかな」

と、その前に日課である朝の筋トレを行づべジャージをもつて道場へ足を運ぶ。

「わいと、早速済ませますか」

軽く気合を入れて、俺は道場に足を踏み入れた。

すると、どうやら先客がいたようだ。セイバーが道場の奥で行儀正しく正座していた。

「おや、シロウですか」

俺の気配に気づいたのか、セイバーは「むかの方に振り返って微笑みかけた。不覚にも、そんな彼女の可憐な仕草にドキリとしてしまった。

「どうしたんだ、セイバー。こんな朝早く」

俺の内心をセイバーに語られぬようすぐに話題を切り替えた。

「どうやら今回のシロウの召喚は成功したようで、ラインが繋がつているようです。そのため体調がよすぎて、今日は早めに田を覚ましたしまいました」

「そうか。そう言えば、俺の魔力が少しセイバーの方に流れている気がするかも」

「ええ。前回はシロウが私を召喚した瞬間にラインを閉じてしまつたみたいなので上手く繋がらなかつたみたいですね。しかし今回はシロウから魔力が供給されている」

前回の聖杯戦争では、ランサーに追われている最中にビビリというわけかセイバーの召喚に成功した。しかし、その召喚が不完全だったために多くの障害を残してしまつたのだった。

「ラインが繋がつていて本当によかった。えっとそれなら、靈体化はできるのか?」

「……いえ、私は一応生者といつ位置づけなので、靈体化はできな  
いのです」

やはり、遠坂が言つたことは間違つていなかつたようだ。

「まあ、それは仕方がないな。それに、俺はその方がセイバーを近くに感じられて嬉しいかな」

「私が靈体化できないのは変えられないことなので、シロウにそろ

「言つてもうらえるのは嬉しいですね」

「それなら何よりだ。といひで、俺は少しばかり筋トレをしに来たんだが、道場の端を使つてもいいか？」

「筋トレですか。それならば、せつかくですから私と剣を合わせますか？朝ご飯もあるので、そんなに激しくはできませんが」

願つてもいないセイバーの申し出に俺は即答する。

「それは是非ともお願ひしたい。セイバーがいなくなつてから、あまり剣を振るう機会がなかつたから腕は落ちているだらうけど、聖杯戦争に向けて少しでも相手と立ち合えるようにしたい」

何しろ世界の命運が俺たちにかかるつているのだ。少しでも強くなれるのであれば何だつてするぐらうの氣概をもつているつもりだ。

「わかりました。では、はじめましょつか。もううん容赦はしませんよ」

「臨むといひだ。思いつきり来い……！」

1時間後、俺はボロボロになつた体を携えて、ストレスの発散をしてご満悦の腹ペコ王様を今度は舌で満足させるべく台所で次なる戦いを始めたのだった。



「坊主の料理、うまいな」

現在時刻は、7時を少しまわったところ。俺と遠坂、セイバーそしてランサーも加わって朝の食卓を囲んでいる。

「Jの味は実に久しぶりです。やはりシロウの料理はおいしく」

JへJへと頷きながら幸せそうに食べるセイバー。Jのような反応をしてくれると作る側としても嬉しい。

「とは言つても、ほとんどパンを焼いただけよね」

呆れ顔で遠坂が答える。

「いえ、Jのサラダやスープは絶品だ。それにパンの焼き加減も絶妙。さすがはシロウだと思います」

「セイバーの口に合つたようで何よりだよ」

「この時代には美味しい料理があつたんだな。オレはある赤くてとにかく辛いヤツしかこつちで食つてねえから軽く感動してるぜ」

ランサーも相当気に入つてくれたようだ。というか、赤くて辛い料理つてなんだ?

「まあ、わたしも士郎の料理は好きだけじね。……ねえ士郎、テレビつけていい?」

「いいぞ。ニュースでも見るのか」

そう言えば、普段はあまり食事中にテレビをつけないよな遠坂は。

「ええ。今日は少し気になるのよね。聖杯戦争も始まつたし」

なるほど、民間のニュースでも聖杯戦争の手掛かりが見つかるかも知れないしな。

『昨日深夜11時頃、冬木市においてホテルが全焼するという火事が発生しました。火災により、32人が意識不明で病院に搬送されました。被害のあつたいすれの方も目立つた外傷はなく、死傷者も今のところは出ていません。被害にあつたホテルは、コンクリート造りの7階建ての建物で、出火の原因は現在不明ままで。現場を目撃した方に当局の取材班が話を伺つたところ、現場は火事が発生するまでは何事も起こらず、突然7階建てのビルが一瞬で青い炎包まれたとのことです。その後、消防が駆けつけ消火活動が開始されましたが、炎の勢いは全く衰えず、建物が全焼した後に唐突に火が消え去ったとのことです。警察は事故と放火の両面で捜査を続けて……』

「なあ遠坂、これって……」

サーヴァントの仕業じゃないのか？

「ええ。ここまで不自然なことが多ければ、間違いなくサーヴァントの仕業ね」

「くそ。もう動き出してきたか」

思ったよりも早く、事態が進展した。

「シロウ、凛、こじは一刻も早く敵を倒すべきだ

確かに被害者までもが出てしまった。さらなる被害者を出さないためにもすぐに出発するべきではある。

「いや、情報が足らなすぎる。無闇に敵の懷に飛び込むのは危険だ」

前回の聖杯戦争もその場凌ぎの作戦で、何度も失敗をした。やはり、事前の情報なしで戦つのはリスクがある。

「しかし、シロウ」

セイバーもハイリスクであることは重々承知なのだろう。力のこもった声で訴えかけてくる。

「セイバーの気持ちは分かる。一人でも犠牲者を増やしたくないのは俺も一緒だ。それでも、俺たちがやられちまつたら意味がないだろ？出たとこ勝負の戦いを仕掛けるのは得策ではないと思う

「確かに士郎の言つことも一理あるわ。でも、今回はセイバーの方が正しいかも知れないわね」

「やうなのか？でも、相手が罠でも仕掛けてたらどうするんだ？」

「その可能性は薄いわ。ただ、ないとも言い切れないわね」

「なんですか？」

遠坂はどこからかメガネを取り出して、説明をはじめた。

「理由は三つ。まず一つ目は、全てのサーヴァントが召喚されてからまだ日が浅いこと。昨日念のため教会に電話をかけて確認したんだけど、一昨日にバーサーカー・アサシン・アーチャー、昨日ライダーとキャスター召喚されたようね。それを考えると眼を張つてあるとしても、あまり強力なものではないはずだわ」

確かに一日や二日では、大規模な結界などは張ることができない。

「二つ目は、炎が建物全体を包んだことよ。もし、サーヴァント同士が戦っていたのならばわざわざ建物全体を火事にする必要はないわ。このサーヴァントとマスターは、生氣を吸収して魔力に変換するためにはホテルを襲つたのでしょうかね。その証拠に誰一人死んでいないわ。死んでしまつたら、その時点で生氣が吸えなくなるもの」

正気じゃないな。人間の生氣を魔力に変換するなんて。

「三つ目は、夜のホテルで火災が起つたこと。夜のホテルなら、確実に沢山の人間がいるし、運がよければマスターも滞在しているかも知れないから一石二鳥だわ。それを考えると今夜も動きがある可能性が高いわね」

「なるほどな。つまり、その動いてきたところを狙い討ちにしようつてことか」

「そゆこと。憶測に過ぎないけど、サーヴァントに生氣を吸わせるほどのマスターだから、たいしたことはないだろうし、早い内に倒さないと相手の魔力が増えていくからね」

「よし、それなら冬木に行くか。鉄は冷めない内に打てだ」

「いいえ。さつきも言つたように敵は夜に動き出す可能性が高いわ。それまでは戦いの準備をしたほうがいいわね」

「ほつ。冴えてるな嬢ちゃん。そんで、これから何をするんだ?」

感心した様子でランサーが口を開いた。ランサーの満足げな表情から察するに、遠坂と同じことを考えていたのだろう。

「衛宮くんが言つのように情報が少なすぎるっていうのも一理あるわ。そこで、多少の情報収集を戦いの前にしておくべきね」

「では、現場に向かいますか?」

セイバーが落ち着かない様子で尋ねた。

「いいえ。まずは教会に行きましょう。あそこなら何かしらの情報が入っているかも知れないわ。綺礼もないから、文句は言われないと思うし」

聖杯戦争関連の後処理を任せているのは教会だ。教会ならば、隠された情報が何かしらあるだろう。

「よし。今日の予定は決まりだな

早くも第6次聖杯戦争は動き出した。そして俺たちもついに始動する。



## 思い出

時間もあることだし、教会には徒歩で行こうとしたが、やがて「うーん」となった。  
ランサーは體化している。

「しかし、またこうして3人でこの橋を渡るとは思わなかつたな」

「そうねえ。センバーなんてあのとき黄色いカツパを着せられて  
……ふつ」

「凛。あれはシロウが」

「いや、あの鎧姿で街を闊歩するわけにもいかんだろう」

「あれはシロウが悪い。せめてもシロウの服を貸してくれればよかつたではありますか」

「なんだよそれ。セイバーだって、カツパならいいって言つたじゃないか」

「それは、シロウがカツパしか私に選択肢を与えたから仕方なくですね」

「あははっ。ホント傑作よね。甲冑の上に黄色いカツパって、逆に目立つじやない」

「まあ、なんだかんだでセイバーに似合つてたし、かわいかつたらいいんじゃないかな?」

セイバーは顔を真っ赤にして反論していく。

「なんですかそれは。いいはずがないでしょ！」

「あらそり、セイバーだつてあのとき文句一つ言わなかつたわよ。  
今更士郎を責めるのもひどいんじやない？」

「そりだぞセイバー。それに、今となつてはこいつ思に出じやないか」

「これ以上は私に対する侮辱と取つますよ」

「うわつ。本気で怒つてる。

「！」めん。悪かつたよセイバー

「やうね。少し言ひ過ぎたわ」

「分かればいいのです。もう、あれは忘れてください」

まあ、何とかセイバーが聖剣を使つ」とは回避されたようだ。

「でも、何とかセイバーが聖剣を使つ」とは回避されたようだ。

遠坂、懲りてないし……

「それに、セイバーもこのままじや気が済まないでしょ

……なんか、嫌な予感がする。

「そうですね。シロウは、幾度となく私を辱めていますからね

二人の視線が突き刺さる。

「セイバー、わたしにいい考えがあるんだけど」

やばい……

「なんだじょう?」

これは、絶望的だ。

「士郎がセイバーに新しい洋服を選んであげるのはどうかしら? それなら、士郎もリベンジになるわけだし、セイバーも納得がいくでしょう? もちろん士郎のおいつよ」

「それはいいですね。是非ともそうしたい」

もちろん、拒否権はありませんよね……聞くまでもなく。

## 教会

「衛宮士郎君がセイバーのマスターで、遠坂凜さんがランサーのマスターでよいしいかな」

一人ではいと答える。

「それでは、お一人を正式なマスターとして登録をいたそう」

登録を手早く済ませ、アーニー口神父が話し始めた。

「いや、それにしても驚きましたな。こんなにも早く聖杯戦争が再開されるとは、思つても見なかつたことですからな」

「ええ。わたしも驚きました。おそらく、わたしたちによつて聖杯が破壊されたことにより、行き場を失つたマナが大聖杯に戻つたことでこんなにも周期が早まつたのだと思いますが、確証は無いですね」

「なるほど。考えましたな。私もその線で探つてみることにしますよ」

「ええ。よろしくお願ひします」

一人はだいぶ氣をよくして話している。遠坂も言峰相手とは偉い違いだ。

「ところで、お一人は別の要件があるのでないですか」

さすがに一教会の司祭だけあって、話が分かるな。

「鋭いですねデニー口神父。実は冬木のホテル火災の件についてお伺いしたいのですが」

「やはりそうでしたか。あれは、サーヴァントの仕業でしょうね。私どももなるべく裏工作はしたのですが、あれほど派手にやられては隠しきれませんよ」

「どうやら、当たりのようだ。

「やはりそうですか。どのようなサーヴァントがやったかはわかりますか」

「それは分かりませんな。しかし、対軍宝具を使用したのは間違いないのではないですか」

まあ、対軍宝具を使うといつことだけでは有力な情報にはならないな。

「他に変わったことはありましたか？」

「それがですね。どうやらあの炎には対魔効果があるようですね。それに、水への耐性も備わっている。魔術的にも、物理的にもあの炎を消火するのは困難ですぞ」

「そうですか。それならば、教会側はどうのように消火活動を行つたのでしょうか」

デニー口神父は、笑顔を浮かべて答えた。

「いやはや、その質問にはお答えしかねますな。ただ、貴のことですから、分かつて聞いているのでしょうか？」

「いえ、わたしには何のことだか」

とぼけたように振る舞つ遠坂。なるほど、わざとリスクが高い質問をすること、相手の注意を引きつけて、自分の事件に対する関心の深さをアピールしたわけか。

「どうやら貴方にとつてこの聖杯戦争は特別なようですね。分かりました。少しだけ、私らの持つ機密情報を教えましょう。私の感じたところ炎の対魔力はCランクといったところでしょうか。並の魔術では歯が立ちませんね。それが建物全体に広がっていましてから、局所集中をすればその対魔力はB以上になるかもしません。侮れん相手ですよ。それに、彼らは火力や炎の形を自由に操れるようですな。と、ここまでですか。これ以上の情報はさすがの私も教えることはできませんぞ」

「ええ。わたしも充分満足いたしましたからそのくらいで結構ですよ。それで、わたしのサーヴァントですが、前回の聖杯戦争も参加しています。どうやら前回の聖杯戦争の記憶が残っているようで、珍しいケースの召喚になってしまいました」

魔術師同士の取引では等価交換が基本だ。さすがは遠坂、抜かりがない。

「参りましたな。そのような情報を出されてはおつりを払わなければなりませんかね」

「いえいえ。これ以上聞き出しあしまえば、わたしのほうが提供できる情報がなくなってしましますから」

「ははは。分かりました。では、それはまたの機会に取つておきましょう。それでは、お一人とも何かありましたら、またこの教会におどずれでくださいな」

「ありがとうございます、デーラー口神父。神父もお体にお氣をつけ  
て」

「ええ。お一人とも健闘を祈りますぞ」

「「はい、頑張ります」」

「ほほっ。息はぴたりのようですね。将来が楽しみですぞ」

そんな神父の言葉に一人で頬を赤く染めていた。本物の神父様に  
言われると、妙に意識しちゃうよな。

- \* - \* - \* - \* -

まだ、ストックはあります。  
あるんですけど、「一日置きぐら」の不定期連載になるかもしませ  
ん。  
ちょっと書くなつてきましたんで……

自サイトで書いたりるので、  
6th Heaven-s Feel【中編】  
に後何話かで突入します。  
あとがき的なこともちょっとずつ書いてこきますね。

「ここで火事が起こつたのか」

教会を出た俺たちは、火災のあつた現場に来ていた。

「これはひどいですね」

被害にあつたホテルは、原型すら留めておらず瓦礫の山と化していた。死者が出なかつたことが奇跡と思われるほど跡形もなく、残骸だけがそこにあつた。

「これは異様な風景としか言いようがねえよな。よくもまあ、ここまで派手にやつたもんだぜ」

もう一つ、この場所が明らかに異質と言える要素があつた。

「本当よね。これだけホテルが焼け崩れてるといつのにその周りの建物は焼け跡一つ付いてないなんて……」

まるでホテルの残骸を見下ろすかのように、周りのビルは平然と並立している。焼け跡だけがぽつかりとあいた穴のように存在し、余計に周りからは断絶された空気を纏つて見えた。

「これほど目立つのに、世間はあまり騒がないんだな」

「その辺は、教会がなんとかしてゐるんでしょ。ここには結界が張つてあるし、普通人には認識阻害が働くよつね」

見回すと、マスコミの姿は既になく、人々も通常通りの動きをしている。

「しかし、考えたもんだぜ。ここまで無茶苦茶に壊されちまつと証拠があまり残らねえ」

「ええ。このマスター、なかなか頭の切れるヤツだわ。派手な行動を起こした割には、自分たちが不利になるような手掛けかりを全く残していない。雑魚かと思つてたけど、警戒を厳しくする必要があるわね」

その場凌ぎにしかならず、暴挙とも思えた敵の行動だが、現場の検証を続ける内に、実に緻密に計算された計画的な犯行であることが判明した。

「くそっ。人を傷つけながらも、それが理にかなってるなんて」

「そうね。わたしも、コイツら戦い方は最低だと思うわ。それでも、これが最善の手であるといふことも否定はできない」

聖杯戦争とは、七人のマスターとそのサーヴァント達が命を賭して一つの聖杯をめぐり殺し合つ儀式である。そこに、人間の常識や慈悲などは通用しない。

「シロウ、このままですとこのマスターは更に強くなる。それに、次に犠牲が出ることになるやも知れない」

「ああ。早い内に『イイヅラを無力化しなければ、取り返しのつかない事態になりかねないからな』

「 そうね。だから今日は今後を占う意味でも、勝負の一戦となるわ  
ね」

今宵、四人を待ち受ける結末は生か死か。戦いの火蓋が切つて落とされる。

「あなたは誰?」

わたしは、彼に向かつて問いかけた。しかし、彼からの返事はない。

「あなたは、わたしの中で何をしているの?」

すると彼はわたしの方を向いた。

### 『外に出たい』

彼自身が口にしたわけではないが、そんな想いがわたしの中に入り込んできた。とても強い想いだつた。

「あなたはどうして、外に出たいの?」

わたしは彼に、そう尋ねた。そして彼は再び想いをぶつけてきた。

### 『外に出たい』

彼の答えはわたしの質問に対する答えにはなっていなかつた。だけどわたしは彼の言葉で、彼が外に出ること以外望んでいないことを理解した。

「あなたは誰なの？」

彼は、わたしの方を向いたまま黙つていた。

『外に出たい』

わたしも彼を見つめて黙つている。

『外に出たい』

沈黙が続く。

『外に出たい』

わたしも彼も話はしていない。

『外に出たい』

それなのに、わたしの心には彼の想いが津波となつて押し寄せてくる。

『外に出たい』

騒音が鳴り響く。

『外に出たい』

彼の想いに押しつぶされそうになる。

『外に出たい』

わたしは彼に消されるのかも知れない。

胎動 Side Sakura (後書き)

私のサイトでいうFFPP 6th Heavens Feel  
中編に突入です！！

ついに戦いの火蓋が切って落とされます！！

## 我が儘

俺たちは、新都の火災現場を訪れた後、遠坂たちの買い物に付き合つて、今ボーリング場にいる。

「なあ、セイバー」

昼頃からボーリングをはじめたわけだが……

「む、シロウは勝ち逃げをするような人だったのですね」

既に7ゲームを終え、8ゲーム目がはじまりうとしている。

「いいじゃない。セイバーも気に入ってくれたみたいだし」

ボーリングに行こうと遠坂が言いだしたときに止めなかつた俺  
はバカだと思う。

「坊主、そろそろ負けてやつたらどうだ」

ランサーが一人には聞こえないような小声でそつとつぶやいた。  
「できることがないやつだね」

手加減して負けよつとすれば、一人は本気で怒るのだ。ものす  
ごい剣幕で責められたら、真剣にやられるとえない。

「シロウ、なにをしているのです」

セイバーは、次のゲームをやりたくてうずうずしている。しかしながら、女の子の買い物に付き合つた後にボーリングをフゲームである。俺の体力はもはや限界だ。この後に敵との戦闘があると思うとぞっとする。

「いや。もう終わりにしよう、セイバー。ここで体力を使い果たして、もう戦えませんって状態になつたら本末転倒だからさ」

「やうやくシロウは逃げるのですね」

セイバーは実に不満げな顔をした。

「逃げてない。確かにセイバーはまだ疲れてないかも知れないけど、俺や遠坂のような生身の人間にはちょっとばかしつらいんだよ。今日は終わりにしよう。そのかわり、またみんなでここに来よう」

俺がそう言つと、セイバーは寂しそうな顔をして押し黙つてしまつた。

「だめか?」

「あと1ゲームだけでもいいのです。だから続きを……」

セイバーは必死にそう訴えてきた。

「どうして、セイバーはそんなにゲームを続けることにこだわるんだ?俺の言葉を理解してくれてないわけではないんだぞ?」

「それは……」

再びセイバーは沈黙した。すると遠坂が声をあげた。

「セイバーはこれがわたしたちと遊ぶ最後の機会だと思つてこりの  
よね

遠坂の言葉に、セイバーは驚いた表情をした。

「凜、私は……」

「図星よね

遠坂に言葉を切られ、セイバーは言い返せない。

「貴女はサーヴァントだから、聖杯戦争が終わればこの世界からは  
いなくなる。そうなる前に、せめてもの思い出をこの世界でつくり  
たいと思つた。そうでしょうか?」

「…………」

セイバーは完全に言葉を失つてしまつた。しかし、遠坂の言葉  
を否定しないところみるとセイバーがこの世界で思い出をつくり  
たいと思ってくれているのは確かなようだ。

「セイバーが俺たちとの思い出をつくりたいと思つてくれているの  
なら、尚更今日のといひまボーリングを終わりにしよう」

セイバーが俺たちとの時間を大切に思つてくれてこることはす  
ごく嬉しい。でも、その前提に俺たちとの別れがあることが悲しか  
った。だから、俺はここに誓つ。

「聖杯戦争が終わつたら、またみんなでここに来よう

決して叶わないはずの夢。それでも俺はこの夢をあきらめない。

「そのときせいいぐりでもセイバーのわがままに付き合いつて約束する」

セイバーからの答えはなかつた。それでも、セイバーが少しづつ自分のことを考えるようになつてきたのは確かだと思つ。まだ聖杯戦争は始まつたばかりだ。セイバーがいぐり否定しようとも、俺はこの約束を絶対に守つてみせる。

## 感知

「嬢ちゃん、敵だ」

異変は突如現われた。

「タイミングがいいわね。これは幸先がいいわ」

ボウリング場を後にし、今俺たちは新都の見回りをしていた。

「セイバー、相手の場所はわかるか？」

「ええ。微弱ではありますが、敵は魔術を使用したみたいですね。おそらく、大規模な魔術の発動に必要な準備を行なつたのだと思います。ですから、魔術が使用された場所に行けば敵と遭遇する可能性は大きいかと」

なるほど、先程から甘い香りが漂いだしたのはそれだったのか。

「よし。すぐに行こう」

「はい」

セイバーが返事をすると、俺たちは一斉に走りだした。疾風のごとく、夜の新都を駆け抜ける。

「ついに始まるわね」

生きるか死ぬかの殺し合い。恐くはないと言えば、それは嘘だ。

しかし、体は高揚感に満ちている。

「坊主、戦いの準備はできるんだろうな」

「ああ。この戦いは負けられない。敵には容赦しないし、犠牲は絶対にださない」

正義の味方として、偽善だと罵られようが、俺は全ての人を救つてみせる。

「容赦しないひとつと、犠牲はださないつのは矛盾してゐるぜ」

必ず生まれるはずの犠牲は確かに存在する。自分を殺しにくる敵の存在は、救うわけには行かない。情けをかければそれは容赦のない戦いではなくなり、相手を排除することは犠牲が生まれるということにつながる。

「わかつてゐる。相手を殺す気概で臨まなければ、俺が殺される。それでも、俺は犠牲をだないことであきらめない。どんなに不可能なことでも、正義の味方を目指すかぎり、一人たりとも死なせはしない」

殺さずとも命を救うことは不可能ではないはずだ。それがたとえ奇跡と呼ばれるものでも、俺は希求し続ける。英雄工ミヤと同じ運命を辿らないように、衛富士郎は衛富士郎の道を歩む。

「はっ。考えは甘いが、オレは坊主みたいなヤツは好きだぜ」

「ランサーに好かれても嬉しくないな」

「ちげえねえ。坊主は嬢ちゃんにしゃべりなんだしな」

「なつ……」

「違うのか?」

「マイツ、やつぱつ腹が立つ。

「まあ、嬢ちゃんも坊主の虜になつてゐてえだし、相思相愛つて  
といひか」

「アンタね。これから戦いなんだから少しあは緊張感を持ちなさいよ」

「顔を真っ赤にしてるヤツに言われたかねえなあ。なあ、嬢ちゃん  
遠坂の顔は紅潮していく、俺と田が合つなり顔を伏せてしまった。  
それを見るなりランサーが言った。

「オマエら惚れてんな」

「なんださ?」

「どうか、なぜかう繫がる。

「ひとつ、誰から見ても惚氣だろ」

「そんなことないわよ。ねえ、セイバー」

「早く行きますよ。敵に逃げられまーす」

「いや、セイバーなんとか立腹です。なんですか？」

## 感知（後書き）

プチ♪無沙汰です。

最近、TBS SGサイト（血サイト）の方では更新ができてなくて、  
ダメですねえー。

まあ、やる気がないわけじゃないんですけど、要するにスランプで  
す。

でも、TBS SGでは十莫氏（じゅうばし）の『変  
わらなのはわたしも同じで』（Fant 短編連載、恋愛ギャグ、  
士凜）の7話目がアップされたんで、是非読みにきてください。

そして、いつのまにやらお気に入り小説登録してくださった方も増  
えていて感動しました。FFFFPもいいかげん続きを書かないとな  
あ……。

ホテル ↗ side ???↗

s i d e ???

夜空には曇雲がたちこめ、漆黒の闇が辺りを包み込む。オフィス街は静寂に支配され、閑散とした路地に冷たい風が吹き抜けている。その一画において、異質な光景が展開されていた。

「ふはははは。よいぞ。よい炎ぞ」

冬木ビジネスホテルと呼ばれる大きくはないが決して小さくもないビル全体が燃え盛る灼熱の炎に覆われていた。

「さすがでござります。私めも」のよつに美しい炎はついぞ見たことがありません」

男が言つように、その光景はまさに圧巻だった。火災現場の空間を切り取り、別の空間に貼りつけたかのようにホテルだけが真っ赤な炎で燐然と輝いていた。芸術と言つても過言ではない程、神々しく美しい、そして人々を魅了してやまない恐怖がそこにはあつた。

「今宵の酒と女はさぞ美味かるつぞ」

そのホテル内部一階のフロントには、豪勢な衣装を纏つた男がソファーに座り、その背後に中肉中背の男が控えていた。

「お酒の用意はできております。お持ちしますか」

ソファーに座る男に、背後の男がそう問いかける。

「まだ良い。それよりもあの女はまだなのか」

「ただいま着替えをさせておつますので、今しばらへお待ちください」

「遅いぞ。直ちに連れて参れ」

「はつ。ただいま」

慌てて背後の男が化粧室に向かう。そして中に向かって叫んだ。

「遅い。こつたい何をしてこる。陛下がお待ちであるや」

しかし中からはじつに返事がない。

「出でこないならば入るべ。早くしや」

すると、控え目に化粧室のドアが開いた。男が強引に女の腕を掴み外へ引きずり出す。

「いやつ。やめて」

「黙れ。小娘が！ 付いてこい。陛下がお待ちだ」

「いやだ。やめて」

猶も抵抗を続ける女に対して、男は空いている手で杖を取り出し女に向つて振りかざした。

## 「Gelehrt en Muskeln」

瞬間、女の体はぐつたりと倒れこんだ。男は、倒れた彼女を抱えあげソファーに座る男の元へ歩いて行く。

「陛下。お待たせいたしました。女を連れて参りました」

ソファーの男は、女の肢体を一通り見回すと女に向って言葉を発した。

「なんと美しい。やはり我の眼は確かであつたか。素晴らしいぞ。ほれ、我の隣に座らんか」

「やめて。いやだ」

女は必死に声を張り上げるが、体を動かすことができず、為す術もなくソファーに座らせられる。

「今宵は宴だ。じつくつと愉しむ」と云つた

8組のマスターとサーヴァント達の殺し合ことつ饗宴が今までに始まろうとしていた。

s i d e   ? ? ?   e n d

## ホテル～side ???～（後書き）

- \* - \* - \* - \* - \* - \* -

活動報告のほうでも書きましたが、ずいぶん更新が久しぶりになつたしましたが、まだストックはありますので、ちょっとずつ更新していきます。

自サイトで更新を続けてるのはとりあえずAFだけですが、FF PPも更新できたらしていきます。その時は、こちらでもお伝えします。

さて、ここからきのじわとの世界に、私の世界の侵食が進んでいくと思います。

というのは、オリキャラが登場してしまつからなんですね。  
オリキャラには賛否両論あるのは、至極承知しております。

実際、私もSSでのオリキャラには否定的ですしね。まあ、それでもオリキャラありのSSへの私なりの挑戦というか、私なりの型月ワールドの理想形を表現するための一手段として上手く機能させられたらしいなと思っています。

正直、リスクトしてやまない型月作品に私のオリキャラを混ぜてSSを書いていくのは気がひけるんですけどね。まあ、AFも書いてますし、こちらはこの路線でつてことで！SS自体が、原作にメスを入れていく行為ですし、なんとか読者の方々が不快にならないように気をつけながら好き勝手やつていきます！！

そこだけが別世界だった。

「なんなのよ。これ」

目の前の建物だけが、燃え上がっていた。周りのビルには一切火が燃え移ることなく、周囲の干渉も全く受けていない。その相互不干涉で一層建物の不気味さは増し、異質な空間を形成していた。

「これは一筋縄では行きそうにもありませんね」

小規模ではあるが、ビルの周囲に張られている結界は精巧かつ強力なものである。また俺が解析するかぎりは、炎の威力は強大で優れた抗魔力を備えていた。

「坊主、顔が青ざめてるぜ。大丈夫か？」

ランサーの指摘通り、俺は極度の緊張状態にあった。

「ああ。大丈夫だ。すぐに突入するぞ」

「嘘をいいなさい。アンタ震えているじゃないの！」

確かに遠坂の言う通り、さつきから震えが止まらなかつた。

「いつたいどうしたのです、シロウ」

原因は分かつていた。

「悪い。戦いが怖いわけではないんだ。だけど、火事を田の前にすると足がどうしても動かない」

十年前の冬木市史上最大最悪の大火災。その災禍に少年時代の俺の姿があった。目の前には、凄惨な風景が広がっていた。肌が焼け爛れ、助けを求めて手を伸ばす者。生前は赤ん坊であつただろう肉塊を抱えて助けを求める女。道を見渡せば死体の山ができていた。

「あの火事は聖杯が起こしたことは頭では理解してる。それでも、誰にも手を差し伸べられずに、ただ自分が生きるために歩き続けることしかできなかつた自分がもどかしい」

何度も助けてと声をかけられた。道行く人々に何度も手を差し出された。俺はその声を、その手を無視することしかできなかつた。

「今でもあの火事のことを夢に見ることがある。そのたびにあのときの恐怖が甦る。あのとき何もできずに孤独であるしかなかつた自分の姿が脳裏に焼き付いて離れない」

あの火事の中にいた人々のほとんどが死んでいく中、俺は生き残つた。俺が切嗣と出会えたことはまさに奇跡だつた。

「シロウ、あの火事はアンリマコがおこしたものです。あなたや当時の私のマスターも誰一人として間違つた者はいない。あれがあの場では最善策だつたと私は思います」

確かにそうかもしけない。それでも、俺は正義の味方を志す者として当時の俺は不甲斐なかつたと思うし、一生心に背負つていかなればならない枷であると受け止めている。

「セイバーの言つ通り、あの火事は誰の所為でもないのかも知れない。それでも、俺が助けを求める者達にしてやれることはあつたと思う。それを無視して最終的には俺は生き残った。そのことを俺は一生心にとめておかなければならぬと思つて、今この世で生を全うしていることに感謝をしなければいけないと想つ」

だからこそ、多くの命を失つたあの景色を目撃当たりにするとい、全身に恐怖が駆けめぐる。

「俺のこの震えは、一生俺が忘れてはならない感情が表に現れたものだ。ただそれでも、一度とあのような光景が起こらないようにするためにも、俺がここで立ち竦んでなんかいられない」

今、過去との楔を断ち切る試練が訪れているのであつ。この第六次聖杯戦争は、セイバーのためでも遠坂のためでもない、俺自身のための戦いなのだ。

「いくぞ。俺はこんな恐怖には負けない」

そして俺は、紅蓮の地獄の中に一步を踏み出した。

- \* - \* - \* - \* - \* -

前の話、Enterキー押す作業忘れてました。まあ、そのお詫び（？）も兼ねてさうそく更新つ。

明日といつか今日あたりから、「電車で執筆作戦」も復活させようかなあ……。

更新する楽しさに身を委ねてどんどんストックがなくなつていいくと自分の首が絞まるわけですし、FFFFPの執筆も進めないとこつまで経つてもロンドン編なんて夢の夢ですしね……。

あー、構想だけは先まで進んでいるの……それを形に出来ない自分の筆力のなさが憎い……憎すぎる。

よっしゃー、頑張ります。

一階はロビーであった。俺たちの身体には軽く結界を張つてあり、普段通りの動きができるが、部屋には煙が充満しており、素肌を晒せば忽ち焼け爛れるほどの熱風が吹き付けてくる。

「ほう。我的炎が暴れていると思つたら、来客があつたようだの」奥のソファーに座つていた男が立ち上がり、机に向つてそう言つた。

「ずいぶん余裕ね」

遠坂の挑発に男は笑みを浮かべて答えた。

「我に逆らつヤツは殺せばいいのだ。片端から殺せばいいのだよ」

尚も男は笑みを崩さない。

「ひやはつ。殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ。我は皇帝。逆らつ者は死で以て、己の佛を知るべし」

男は楽しそうに猛り狂つている。

「コイツ、頭狂つてゐわ

「確かにイカれてるな」

とはいえた、聖杯戦争においては、狂気に満ちることは強ち悪いことではない。寧ろ、バーサーカーのサーヴァントの存在が示すように狂氣は時として脅威となる。

「ふははははははは。愉快だ。実に愉快だ。マスターとサーヴァントの諸君。少しは我を愉しませてくれよ」

「こちらをよく見てもらつちゃ困るわね。Anfang

疾風の「」とく迫り来る火炎を、遠坂は水系の魔術で鮮やかに対処する。

「」のような攻撃であれば私の抗魔力で突破できます。シロウは後方支援を」

「わかった」

「はつ。コイツはオレだけで十分だ。オメエらは休んでな」

セイバーとランサーが一手に分かれ火柱へと突っ込んで行つた。俺は自分に出来る最大限の援護を展開する。

「 投影開始」

投影は自分との戦いでもある

「 創造理念、鑑定」

自分の剣が相手を倒すイメージ

「 基本骨子、想定」

自分の理念が、現実に侵蝕されることは許されない

「仮定完了。是、即無也」

## 炎弾

「熾天覆う七つの円環」

かつてトロイア戦争において、大英雄の投擲を防いだという、七重、皮張りの盾。俺が投影した盾は四枚であるが、不完全ながらもその強度はオリジナルにも劣らない。一枚一枚が古の城壁に匹敵する光り輝く四枚の花弁は、相手の炎弾を無力化させた。

「くつ

ネロの攻撃をなんとか回避することに成功した。しかし、今の投影により、俺は魔力の半分以上を消費してしまった。それでも、半分で済んだのは、遠坂の指導があつたからこそかもしれない。

「ほお。貴様らも少しはやるよつだな。では、本気で行くとしようぞ」

分散していた部屋中の炎が一ヶ所に集約される。その形状は、巨大な球体で、まるで太陽のように厳然と浮遊していた。

「おい坊主、あれを防ぐ自信はあるか?」

今度放たれる炎弾は先程のものとは比べものにならないほど威力をもつ。もはや、俺の投影では全く歯が立たない。

「いや、あそこまで大きいと無理だな。でも、手はある」

ネロは、ホテル全体に結界を張り、空間 자체を支配している。い

くらネロの攻撃をやり過げ」したところで、ネロの魔力が尽きない限り追撃が止むことはない。さらに、ネロは結界内においては炎を駆使して空間移動魔術を使いこなす。つまり、俺たちの攻撃は相手に届くことはない。それでも、相手に対抗できる切り札が俺たちには残っている。

「俺が固有結界を発動する。そうすれば、ヤツの結界は俺の世界に塗り潰されて、効果をなくすはずだ。その瞬間に、セイバーの宝具で勝負を決める」

いくら相手の結界が強力であっても、大元のが塗り替えられてしまえば、無力化できる。そうなれば、キャスターを圧倒することができるはずだ。

「それはだめよ。士郎の固有結界は不完全なの。まだ使うには早すぎる。もし無理矢理にでも固有結界を使用すれば、士郎の体が壊れる可能性があるわ」

前回の聖杯戦争の際には、ギルガメシュに対抗するための最終手段として、俺が固有結界を使用することが認められた。しかし、今回キャスター戦は俺たちにとっての初戦であり、手の内を見せるには早すぎる。それにこの戦いは、他マスターが監視をしている可能性が高い。俺が固有結界を開くことは非常にリスクが高い。

「確かに遠坂の言つことにも一理ある。それでも今はそんな使う使わないを議論できるほどの余裕はないだろ。やらなければやられる。この戦いは遊びじゃないんだぞ」

「わかってるわよ。それでも今アンタが固有結界を開くのは、マスターだけでなく協会や聖堂教会が敵になる可能性もあるのよ。い

くらなんでも危険すぎるわ。ここは、わたしの持つ宝石でなんとか持ちこたえる。だから三人は、そのまま突破して相手のマスターを始末して

マスターを失ったサーヴァントは次の契約者を見つけない限り消滅する。そのため、常人を逸した存在であるサーヴァントを倒すよりも、その契約者であるマスターを叩くほうが遥かに容易である。ゆえに、サーヴァントは狙わずマスターを潰すことが聖杯戦争のセオリートとされてきた。

「いくら遠坂でも、あの炎には太刀打ちできない。それにたとえ遠坂が相手の攻撃を受けられたとしても、俺はマスターを殺しはしない」

たとえ敵であっても、人間は絶対に殺さない。偽善だと罵られようが俺はその理想を追い続ける。それが、正義の味方を口指す者として、最低限の義務であると俺は信じている。

「なら士郎は休んでて。セイバー・ランサー、準備はいい?」

「ちょっと待て遠坂!!俺が固有結界を使って活路を見いだすからその…………くあ」

瞬間、目の前が真っ白になった。体の力が抜け、脱力感が全身を支配する。

「遠坂……なにを……」

遠坂は俺を一瞥したのち、相手の炎に目線を移した。

「土郎へ供給していた魔力をカットしたわ。それとともに、土郎の体内に循環していた魔力を吸収して、完全に魔力を断ち切ったわ。もうアンタは、動くのも辛いはずよ。わたしたちが決着をつけるから、アンタはそこでおとなしく見ていいなさい」

体を動かそうにも、指一本まともに力が入らない。立っているのが精一杯だった。

「遠坂、おまえは……くそつ……ビリじて」

「くははは、ビリやら貴様らの覚悟は決まったようだな。茶番は終わりだ。この一発で、終焉とすることにしてやる」

真っ赤に燃え上がる巨大な炎弾が、轟音を立てながら俺たちに迫る。遠坂は、宝石を構え、迫る炎の正面に向かう。そして、遠坂が放った宝石は爆音を放ち虹色に爆発したが、炎弾の勢いはいつこうに衰えない。炎は遠坂を飲み込もうとしていた。

世界は静寂に支配された。先程まで部屋中で暴走していた灼熱の炎も、充満していた煙の匂いも跡形もなく消え去っていた。

「遠坂……」

一瞬前、遠坂は眼前に迫る炎弾を消滅させることができなかつた。炎弾は無防備な遠坂に直撃しようとしていた。

「……どういひとなの？」

しかし、炎弾は遠坂に衝突することはなかつた。当たる直前、突如として炎弾は消失した。残り香さえも一切が消え去り、部屋には漆黒の闇が再び侵食を始めていた。

「おかしいですね。嫌な予感がします」

セイバーは直感Aのスキルを擁する。セイバーの予感は、ほぼ確実に的中するのである。

《ドグウ オンガガガガガ》

突然、階下から轟音が地響きとともに鳴り響いた。

「なんだか知らねえが、音は下から聞こえてくるぜ。どうする、嬢ちゃん？」

「そうね、セイバーの直感が正しいのならば少し様子を見るのが正

解かしらね。ただ、黙つて見ていられない人達しかわたしの周りにはいないのよね」

俺もセイバーもランサーも、先程から落ち着きがなくなつてしまつて。当の遠坂でさえ、はやる気持ちを抑えきれていない。

「では凛、私とランサーは先に地下へ向かいます。シロウには下級英靈並みの戦闘能力があるとはいえ、警戒を怠らず、私達を追つてください。何かあれば、必ず令呪を使うようにしておいてくださいね？」

「ええ、了解したわ。セイバー達も、ヤバイと判断したらすぐに戻つてくるのよ。状況は隨時、ラインを通じて伝えてちょうだい」

二人は軽く返答を返し、颯爽と走り去つた。その場には俺と遠坂だけが取り残された。

「遠坂、俺はおまえが死ぬかと思つたぞ

ネロの放つた炎弾が、奇跡的にも遠坂に直撃する直前に消滅したからいいものの、そのまま当たつていたら今頃は俺は最愛の人物を永遠に失うことになつていただろう。

「悪かったわよ。でも、なんとかなつたじゃない。アンタが固有結界を使うまでもなかつたでしょ？」

「遠坂、それは結果論であつて、そんなことで片付く問題じゃない。あの時おまえは死んでいたかもしないんだぞ。遠坂の命と引き換えにこの戦いに勝つても、俺は全然嬉しくない」

俺にとって遠坂は、自分の命よりも大切な存在である。遠坂の

いない世界などもはや考えられない。

「衛宮くんは人のことが言えるわけ？」

遠坂は声を震わせながらそう呟いた。

「……なんでや？』

遠坂が俺を衛宮くんと呼ぶのは、俺をからかうときか、大事な話をするときかのどっちかである。先程遠坂は衛宮くんと言った。だから、遠坂が傷付かない返答をしようとも思つた。しかし、そうはしなかつた。俺が遠坂を大切に思う気持ちは本物だ。だからこそ、遠坂が危険な目に遭うことを許すわけにはいかない。

「わたしだって、アンタが死にそうな目に遭つ度に心臓が止まつてしまふかと思うくらい心配するのよ。それが今までに何回あつたと思う？もうわたしの魔術じゃあアンタを生き返らせることなんてできないの。士郎が死んでしまつたらわたしはどうすればいいのよ。アーチャーにもアンタを幸せにするつて誓つたんだから、自分から死に行くんじゃないわよ。少しはわたしを頼りなさいよ。わたしだって魔術師なの。死の覚悟はとっくに済ませているわ。それなのに士郎はすぐ身代わりになるとするじゃない。そんなの、優しさではなく傲りよ。わたしがなんのために士郎の彼女になつたと思つてるの？それをよく考えなさい」

遠坂は終始顔を合わせてくれなかつた。

「『ごめん。確かに遠坂が言う通り、俺は慢つっていたのかもしれない。それでも、遠坂の命が大切だというのは譲れない』

この答えが遠坂にとって正解ではないことは分かる。ただこれは、正義の味方を志す俺にとって、決して曲げることができないことだ。俺は誰一人犠牲者を出さないために全力を尽くす。そして俺自身も絶対に生き残る。

「まあいいわ。少しは反省したみたいだから、今日のところは許してあげる。それに、そんなこと言われたら許さざるをえないじゃない」

遠坂はそっぽを向いてそう言った。遠坂の声からは先程まであつた刺は消えていた。

『シロウ、聞こえますか』

セイバーの意思が、ラインが通して伝わってきた。

「セイバー。何かあつたのか？」

『ええ、急いで駆け付けてみれば、驚くべき光景が広がっていました。わたしの視界にリンクしてください。そのほうが説明するより早いかと』

「わかった」

セイバーの視点に意識を移行した。セイバーが言う通り、そこには目を疑う景色が広がっていた。

まず、視界に入ってきたのは先程まで俺たちと戦っていたキャスターとそのマスターの悲惨たる姿だつた。キャスターの宝石がちりばめられた豪華絢爛な衣装は肩口から斜めにぎつくりと引き裂かれ、露出した肌は剣で抉られ、全身が血液で紅く染まつていた。その隣で蹲っているキャスターのマスターは右腕を失つていた。服の袖口からは大量の血が流れ出しており、出血を止めようと朦朧とした意識下で必死に魔術を唱えようとしている。その一人の後方、地下駐車場に不自然に置かれたソファーの上に、純白のウェディングドレスを身に纏い、片腕をついて横たわる女性の姿があつた。

「綾子……」

確かに遠坂が言うように、女性の顔は美綴そのものであった。

美綴は、学園では見たことがないほどの恐怖の表情を浮かべていた。凄惨な光景の中で非常に浮いていた美綴であるが、さらに場違いな人物が存在した。

「……イリヤスフィール」

美しい銀髪を携え、雪のように白い肌の少女は見違はずもな  
く、イリヤスフィール＝フォン＝アインツベルンその人であった。  
しかし、イリヤスフィールは前回の聖杯戦争でギルガメシュに心臓  
を抉り取られて死んだはずだ。今この場に彼女が現れるはずない。

「土郎、貴方があの場所に行くのはまずいわ」

イリヤスフィールとの面識は全くなかったにも関わらず、彼女  
は初めて会ったときから俺のことを知っていた。そして、俺たちを  
殺すことに何のためらいもなかった。むしろ彼女は俺を殺すことには  
意味を見出だしていたようだ。

「たとえイリヤスフィールが俺の命を狙っているのだとしても、俺  
は行くよ。美綴を見捨てるなんてことは俺にはできない」

美綴がどうしてあの場にいるのかはわからない。それでも俺は  
美綴とあらゆる問題を解決することを約束した。今ここで逃げてしまえば、美綴に会わせる顔がなくなってしまつ氣がする。

『確かにシロウの気持ちも分かります。しかし相手が悪すぎる。こ  
こは一旦引くべきだと思います』

今セイバーとラインを共有しているため、セイバーの想いが深

く俺に漫透していく。同じじみた俺の気持ちもセイバーに伝わっているのだろう。

「悪いな。遠坂、セイバー。もう俺の決意は固まつたよ

キャスター、美綴、イリヤスフィール、バーサーカー。あの場に行けば自分の身が危ないということはわかる。しかし、そこには救わなければならぬ人物がいる。それにイリヤスフィールとバーサーカーともいはずれは戦わなくてはならないのだ。それが早まったと考えれば、今も後もたいした差はない。

「まあそれでこそ士郎といったところかしら。ねえ、セイバー」

今更気付いたが、遠坂はランサーとラインを繋がず、俺とラインを繋いだようだ。俺の心理状態も駄々漏れである。

《ええ。頑固なところは相変わらずです》

セイバーや遠坂のほづが頑固だと思つ。

《シロウ、何か言いました?》

「衛宮くん、何か言つた?」

何も言つてません。

## 視界（後書き）

- \* - \* - \* - \* -

AFも久しぶりに更新したといつことで、こちらもストックをアップしてみました。

FFPPはストックを消費していく一方で、サイトのほうは全然更新しないんですね。まあ、行き詰ったわけなんですけど。。。

んで、サイトの最新の更新はこちら

【2011.10.12】AF 2月8日 3・Nexus「微睡

み」更新

しかし、Zeroのアニメは素晴らしい！僕も波に乗りたいですね  
！！

## イリヤスフィール

その場は静まりかえっていた。閑散とした地下駐車場の中央に異質な空間が形成されていた。ソファーに横たわる花嫁姿の妖艶さとは裏腹に、女性は緊張に身を震わしていた。先程までの威厳はもはや見る影もなく、男は苦悶の表情を浮かべ、傷口を押さえながら死の恐怖に怯えていた。そんな光景を四人の肩に座る美しい銀髪の少女が冷然と見下ろしていた。

「久しぶりだねお兄ちゃん」

少女らしい屈託のない微笑みでイリヤスフィールが見つめきた。緊張感に満ちている空間において明らかに異質な存在であった。

「イリヤスフィール、どうして貴女が生きているのよ」

俺はこの田でギルガメシュがイリヤスフィールの心臓を体から抉り取った瞬間を見ている。さらにイリヤスフィールの心臓は前回の聖杯戦争において聖杯召喚の触媒として使用され、現在は慎一の心臓として活動中のはずである。

「リンも元気そうで何よりだわ。わたしのことはイリヤって呼んでほしいな」

「イリヤ、もう一度俺が聞くけどあの時死んだはずじゃないのか

「イリヤの心臓が慎一の体内に存在するかぎり、イリヤが生きていいということは常識的に考えられない。」

「うん、シロウたちは間違つてないよ。確かにあの時わたしは死んだわ」

俺たちが正しいのであれば、今こいつしてイリヤがこじること自体が矛盾することになる。

「今のこの肉体は人形なの。機能としては人間とあまり変わらないけど、やっぱり少し動きづらいかな」

「それって……第三魔法」

遠坂が茫然とした表情でそう呟いた。俺たち魔術師にとつて魔法は魔術とは似て非なるものである。魔法とは科学では到底説明のできない神秘の体現のことと言い、魔法使いはこの世に五人しか存在しないとされている。

「ううん。魔法にすぐ近いけど魔術よ。魂移転魔術つていつて、人形やホムンクルスに魂を移し替えるだけのAINツベルンでは割とよく使われる魔術かな」

イリヤは簡単に言うが、魂移転は魔術の中でも最高級に難しい部類に入ると言った。俺が持つ固有結界がなぜ禁忌とされるのかを遠坂に習つた際に、魂移転魔術は本来魔法の域に手を掛けるほど強力だが、その有用性から禁忌とはされなかつた魔術として挙げられていた。

「それにしてもおかしいじゃない。魂移転魔術なんてシングルアクションで発動できるはずがないわ」

確かに遠坂が言つように、高度な魔術になるほどその術式は複

雑になり、呪文詠唱も長くなるため、魂移転魔術をシングルアクションで発動することは不可能に近い。

「わたしの本体で脳の活動が停止した瞬間に魂が人形に移転されるようにならかじめ用意してあつたもの。わたしがあの瞬間に何かする必要はなかつたわ」

なるほどそれならば呪文詠唱の必要はない。しかしながら、イリヤが生きていることが未だに信じられない。

「君は本当にイリヤなのか?」

ギルガメシュの手がイリヤ体に突き刺さり、心臓を取り出した瞬間の映像が鮮明に思い出される。田の前にいるイリヤは、あの時殺された少女なのか。彼女の口から今一度真実を告げてほしかった。

「そうだよ。イリヤはシロウたちを殺すために戻ってきたの」

依然として銀髪の少女は笑顔を崩さずにいた。それでも、殺気は十分に伝わってきた。

「よかつた」

イリヤは俺たちを殺そうとしている。それでも俺はイリヤが生きていることが嬉しかった。俺が救つてやることができなかつたと思つていた少女が目の前に存在する。それだけで十分だつた。

「なんで……。わたしはシロウを殺そうとしているのよ」

「それは困る。でも、イリヤが生きていることはすこく嬉しい。そ

の感情に殺す殺されるは関係ない」「

たとえ敵であろうとも、死は悲しいものだ。きっとイリヤには俺のそんな感情が理解できないのだろう。

「ふーん。わたしが生きていたことでシロウは死ぬことになるんだよ。それでもいいの?」

聖杯戦争中とはいって、イリヤがどうしてここまで俺の死にこだわるのかは分からぬ。ただ、イリヤの心が揺れ始めている気がした。

「ああ。イリヤと全力で戦つて負けたなら仕方がないぜ。俺だって聖杯戦争に参加している以上、自分の死は覚悟している。だが、俺たちは負けない。邪念に支配された聖杯戦争の螺旋を断ち切るために、世界をこの世の全ての悪の恐怖から解放するために、俺たちは負ける訳にはいかないんだ」「

正義の味方となる第一歩として、必ずや聖杯戦争に終止符を打つ。

「やう。なら、シロウともこれでお別れだね。行くわよ、バーサーカー」

イリヤがバーサーカーの肩から降りると、バーサーカーは轟音を轟かせ俺たちに迫ってきた。

## イリヤスファイル（後書き）

- \* - \* - \* - \*

イリヤ登場です。

こじつけにもほどがありますが、説得力はあるでしょう？  
アインツベルンの財力があれば、イリヤを生かすぐらいやつてのけ  
るでしょう。

## ランサー

岩のような剛腕から振り下ろされた斧剣が目の前で空を切った。

「ううあ、当たれば即死だな」

ランサーでさえそう感じるので。俺が食らえばどうなることか。なぜかふと、胴体を切り裂かれ辛うじて皮だけが繋がっている自分の姿が脳裏に浮かんだが、忘れることにする。

「シロウは後方支援に徹してください。この場合は、私とランサーが引き受けます」

俺も前線で戦わせてくれと言いたいところだが、バーサーカー相手ではダメージを取れる」と言えできないだろう。

「わかった。なるべく投影で応戦するよ」

セイバー達の援護として、頻繁に剣を放つことはできないが、単発でも援護にはなるはずだ。

「わかりました。ただ、無理はしないでください。シロウはいざといふときの要となる。魔力の無駄遣いだけは避けてください

セイバーが戦力として俺の実力を評価してくれたことが嬉しい。信頼を裏切らないためにも的確な判断で効果的な攻撃をしかけることを徹底しよう。

「坊主、話はそこまでだ。ヤツがくるぜ」

「！！」

唸り声をあげてバーサーカーが接近する。それにランサーが応戦し、斧剣を回避しながら突きをうつ。

「体が堅すぎるぜ。オレの槍が当たっても、体勢を崩すだけで平気な顔をしてやがる」

確かにランサーの迅速の突きをまともに食らい、傷一つ付かないバーサーカーの体は常軌を逸している。それでも相手に反撃の余地を与えず、相手の急所を的確に突く攻撃は、さすがはランサーといったところだ。

「守備が甘い。相手の攻撃を躊躇すれば勝機はある」

しかし、敵は古代ギリシア屈指の英雄ヘラクレス。その卓越した戦闘能力で相手がこちらの速さに順応してしまえば為す術もなくなる。その為、早期決着が望ましい。

現在のところ、ランサーが猛攻を見せ、バーサーカーの動きを止めていた。その間隙を縫い、セイバーが強力な打撃を加える。絶妙なコンビネーションではあったが、バーサーカーに決定打を与えるには至っていない。

「嬢ちゃん、これじゃ埒があかねえ。使っていいか

「ええ。むしろ、使うなら今しかないわね」

ケルト神話における半神半人の英雄クー・フーリン。その彼が

所有する宝具『ゲイ・ボルク』、因果を逆転させる“原因の槍”。刺された者はこの世にゲイ・ボルクが存在する限り決して回復できず、死に至るまで傷を背負う。まさにその呪いの槍がバーサーカーに牙を剥ぐ。

「刺し穿つ死棘の槍！！」

## ランサー（後書き）

- \* - \* - \* -

久しぶりのうわですね。

このタイミングになつたのは少し事情がありまして  
私のサイトの15万ヒットが明後日あたりにやつてくるんですね。  
それで、御礼企画を一生懸命考えていて

まあ結局

「15万ヒット御礼企画、ひさびさに想いつきつらひしてやるぜ! -  
! いまとあるもん一拳大放出祭」  
と名打つて、一ヶ月うつがんばる月間にしただけなんですけどね。。

たぶんサイトでは明日発表します。

そして、いよいよやる予定。

一応、加筆修正的なこともしてからちょいとだけ時間かかるかも  
しないが。。。

「やつた」

勝負は一瞬で蹴が着いた。ランサーの槍は巨人の胸を貫いた。逃れることのできない運命。ゲイボルクが敵の心臓を貫くことは、攻撃が放たれた時点で決まっていた。ただそれが現実となつただけの話。当たれば相手を死に追いやるまで癒えない傷が、バーサーカーの命を奪う……はずであった。

「…………！」

槍で開いた穴は跡形もなく消え去り、バーサーカーが斧剣を振り下ろした。並ならぬ反応で回避を試みたランサーであつたが、避け切れず左肩から右の腹部にかけて火傷のような傷痕ができていた。

「ランサー、大丈夫か」

「くそが！確かに手応えは感じたくせによ」

「ここまで感情を露にするランサーも珍しい。俺からもランサーのゲイボルクはバーサーカーの心臓を捕らえたように見えた。

「わたしのバーサーカーは一回殺しただけじゃ意味がないよ」

後方で静観していたイリヤが衝撃の事実を口にした。

「英雄ヘラクレスには十一の試練で十一の命が『えられた』っていう逸話があるの」

英雄ヘラクレス。ギリシア神話中最大の英雄である彼はゼウスとアルクメネとの間で生まれた。彼はミュケナイ王エウリュステウスにより、十一の試練の遂行を命ぜられ、数々の苦難を乗り越えた末に試練遂行を達成し、その見返りとして十一の命を手に入れることがとなる。

「つまり、十二回殺さないかぎりバーサーカーは死なないと」「う」とか

「そうだよ。バーサーカーの命を一つ減らしたことはす」「」と思つけど、シロウたちの頑張りは正直無駄なの

俺たちにとつてはまさに絶望的な展開である。

「ふん。十一の命がなんだつていうの？ つまるところ後十二回殺せばいいだけでしょ。そんなの簡単じゃない」

現在の俺たちの状況が最悪であることは、遠坂が一番理解していると思う。その遠坂が放つ力強い言葉は胸に迫るものがあった。

俺は大事なことを忘れていた。原初且つ究極の衝動。それは、この第六次聖杯戦争を『勝ち抜く』といふこと。

アンリ・マユにより汚染された聖杯が発動されれば、たちまち世界は破壊の渦に巻き込まれる。世界は破滅への一途を辿り、人類は滅亡の危機に苛まれることだろう。それを阻止するため、俺たちが大聖杯を破壊し、冬木聖杯戦争に終止符を打つ。負けるわけにはいかない。

しかし、負けられないことが今まで俺のプレッシャーとなつていた。死への恐れから保身に走り、生に執着していた。防護に徹し、自己保身を第一優先とすることは、時として最善の策となるが、この場面ではそうはならない。背水の陣を布く俺たちは、命を懸けて戦つ覚悟が必要なのである。

無論、自己犠牲を厭わず他者の生に固執する、かつての俺の行動原理は間違つてゐるのである。しかし、死を恐れながらも覚悟を決めて死に直面し、生き抜くために全精力を傾けるという姿勢は、死の恐怖をも凌駕する。

勝ち抜くことが俺たちに残された唯一の道。小さな心の揺らぎが、致命的な隙をつくりかねない。一步も退かない攻めの姿勢が、この戦いを勝利に導く。

「セイバー、俺に時間をつくってくれ」

「長期戦となればこちらは圧倒的に不利となる。早期決着が望ましい。」

「わかりました。私がいる限り、シロウには指一本たりとも触れさせません」

「これ以上ない完璧な返答であった。これで心置きなく自己の世界に入れる。」

「よし、こくわよ」

遠坂の掛け声で各々が一斉に散らばった。セイバーは前線でバーサーカーと対峙し、遠坂は俺の目前に立ち結界を維持しつつラン

サーの傷を治療する。ランサーは、槍を構え結界を越えてくる敵を警戒しながらも遠坂の手当てを受けていた。そして俺は、皆の援護に守られながら、運命の詠唱を紡ぐ。

## 覚悟（後書き）

- \* - \* - \* -

今日から一ヶ月自サイトの方で  
15万ヒット御礼企画はじめます。  
是非、遊びに来てください。

F F P P の最新話も更新します。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4410r/>

---

Fate/for the permanent peace

2011年11月27日09時47分発行